現世利益和讃說教

淨信房充賢原著
大富秀賢校補

343
807

始

特220
661

淨信房充賢原述
大富秀賢校補

現世利益和讃說教

京都　永田文昌堂刊

帝國圖書館藏

現世利益和讃說教

目次

第一席……一
○現世和讃御製作の深意　○一者方便から眞實に入らしむる　○楔を抜くには楔を以てす　○重盛卿と引接の念佛　○菅三位文時卿と惠信僧都　○澁柿の喩

第二席……一四
○圓滿の御號を顯す爲め　○未來は佛、現在は神とは誤れる思想　○本願寺を勅願所と定め給ふ所以　○現當二世御利益の宗旨　○天牌奉安の意義　○親鸞聖人開宗の意　○司馬温公の因緣　○合法　○弘願の信者をして彌々信心增長せしめん爲め

第三席……二五
○神相菩薩と釋尊の壽命　○壽量品と息災延命　○目出度と無量壽　○多賀明神の御本地　○俊乘坊と奈良の大佛　○平次郎の妻と六字の身代り　○順德景と白蛇　○今度百より今五十○何ぞ牛刀を用ゐん

第四席……三四
○傳敎大師と比叡山　○大師號の鏑矢　○天台大師と石の唐櫃　○叡山は皇城の鬼門　○傳敎大師と七難消滅の誦文　○嵯峨天皇の御下問　○傳敎大師を出し給

ふ理由

第五席……四一
○轉重輕受の益　○萬機を選ばざる功德　○華嚴經と二乘の機類　○法華經と無智人中莫說斯經　○彌陀の本願と萬機普益　○彌陀は斯界の衆生に緣厚きなり
○緣談と金の草鞋　○西南戰爭と父子の生別　○六字は稱へ易きに依つて勝る
○光明眞言

第六席……五四
○六字は持ち易き故勝る　○天台の四種三昧の歎異抄の御文　○萬德含藏六字
○念佛より流出の一切經　○六字を開けば八萬四千の法門　○諸行は棟梁椽柱の如く念佛は屋舍のごとし　○阿字十方三世佛　○弘法大師の歌　○阿字の歌
○舟板の名號　○一休禪師の消息文

第七席……六七
○孔子は集めて大成す　○時に合ふ故に勝るゝ德　○麻の狹衣の歌　○大經の三信觀經の三心小經の一心

第八席……七三
○大蛇を見るやうな和讃　○微は助字か　○現世利益讃の所以　○甚深の思召
○重きが輕くなつた例話　○白牛は吉事の前兆　○大地を坤輿と云ふ

第九席……八三
○總じての利益　○田邊の稻荷大明神　○保食命と月讀命　○稻荷大明神の本地

○別しての利益　○德川家康と登譽上人　○家康公と日課念佛　○本尊の身代り
○彌陀より賜りたる天下　○月も日も西へ〳〵の歌

第十席……九一
○業と煩惱とは違ふ　○業と唯識○藥のむくひ　○定業不能轉　○引滿二業
○華報と果報

第十一席……九六
○中夭のこと　○天命と夭命　○電燈の喩　○平等死と不平等死と福盡きての死
○儉約と吝嗇　○桓舜僧都と山王權現　○貧乏も餓鬼道の代り

第十二席……一〇四
○中夭除かるゝ原因　○熊谷と津戸三郎　○津戸三郎の發心

第十三席……一〇八
○梵天と印度人の信仰　○帝釋天の領地　○守り給ふ理由の三つ　○彌陀の本願
に依る故に　○釋梵祈勸の正忠　○內信心を具する故　○高天私なし　○伊蘭林と栴檀の一葉

第十四席……一一四
○四天王の名前　○四寶の歌　○四天王の守らるゝ理由　○四天王は司法大臣
○閻魔王は警視總監　○毘沙門天が七福神たる原因　○新羅明神のお守

第十五席……一二〇
○良忍上人と融通念佛　○鞍馬寺の毘沙門天　○毘沙門天の記帳　○滿洲の匪賊

列車を襲ふ　○日本人は此所に居るぞ

第十六席……一二六
○念佛者と金神さん　○金神の祟らぬ理由　○智覺大師の念佛の講釋　○金神の苦み　○世間通途の義に順ぜよ　○方角違ひのお札　○本來無東西　○金神も祟りやうなし

第十七席……一三一
○地神の守護を明し給ふ　○釋尊の御說法と堅牢地祇　○堅牢地祇の誓ひ　○地神と不動明王　○大日如來の成道と阿修羅王　○阿修羅王の奇計　○側屋の守り　○堅牢地祇と大黑天　○太閤と大黑天

第十八席……一三九
○難陀跋難の二龍は兄弟　○動物の大小　○蝸牛角上の爭ひ　○二龍が念佛者を守る理由　○釋尊の御誕生と二龍の願ひ　○戒急と定急　○源光阿闍梨蛇身を受けらる　○櫻ケ池は東海道線狹の內下車

第十九席……一四七
○閻魔法王の守護　○閻魔王の本地　○餓鬼の種類　○滿米上人と地藏菩薩　○矢田寺の地藏尊　○獄卒は有情か

第二十席……一五三
○魔王の守護　○寸善尺魔　○魔王と神通力　○釋尊と吉祥草　○釋尊の成道と魔王の妨害　○シカの文字の讀方　○昨日こその古歌　○戀すてふの古歌

第二十一席……一六三
○魔の種類　○天魔　○病魔　○五蘊魔　○死魔　○知足安分　○淺くともの古歌　○過去の業報

第二十二席……一〇〇
○足元から鳥が立つ　○心こそ心迷はす心なれ　○心の魔に油斷するな　○慢心は開法の大敵　○羊頭を揭げて狗肉を賣る　○歎異抄の御文　○蓮生坊の歌　○法然上人蓮生を誡め給ふ

第二十三席……一
○神の種類　○權社　○實社　○日の丸の名號　○太神宮と法然上人

第二十四席……一
○逢ひ見ての古歌　○願力不思議より現はるゝ念佛　○聖道の菩提心と淨土の菩提心　○西行の發心　○西行の述懷　○非似西行

第二十五席……一
○觀勢二菩薩の念佛者を守らるゝ理由　○佛果報ずる爲め　○二菩薩の本地　○念佛行者は二菩薩の勝友　○形の友と心の友　○管仲と鮑叔の交り　○心の友は敵中にもあり　○西鄕南州と山縣公

第二十六席……一
○本佛か化佛か　○化佛の守護　○昭和の怪事　○幽靈自動車で遠乘りする

○心理學の解釋も難つかしい
第二十七席……○始めあれば終りあり　○諸佛の守護は十七願のあらはれ　○三世諸佛依念三昧
○守るの種類　○守の字と護の字の意義　○威勢の守り慈悲の護り　○安宅關に
て辨慶の苦肉策

現世利益和讃說教

淨信房充賢原述
大富秀賢校補

第一席

只今より御法筵を結ぶにつきまして現世利益和讃の御意をお傳へ申したいと存じます、この御和讃は我が御開山が淨土和讃の中に十五首お列ね下さいましたが、その御文面を拜見してみますること、平素の御化導にお似合ひ申さぬやうに拜せられます。ナゼかと申すに、御開山平素の御化導は、佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となづけてぞ、千中無一ときらは

るゝとある。然れば助正をだに並べず、正業たる佛號をむねと信ずる同行だに現世を祈れば雑修の人と名づけて千人に一人も淨土参りはならぬとお誡めなさるゝ御開山、それに今更この和讃で現世利益和讃と大きな看板を立て、一首や二首ぢやない、十五首まで列ね、剰へ息災延命ぢやの、七難消滅ぢやのと、なま〳〵しき現世の言葉を置いてお勸めなさるゝことは御開山に似合はぬ御仕打ち、それともこの利益和讃御製作には他の思召があるのか、その邊の御様子が承りたいと不審に思ふ人もありませう、そこで御開山がこの御和讃御製作の深重の思召を伺ひますに、一には方便から眞實に入らしむる爲め、二には圓滿の德號を顯はす爲め、三には弘願の信者をしていよ〳〵信心を増長せしめんが爲めと云ふ

三重の深い思召があるのであります。

先づ初めに、方便から眞實に入らしむる爲めと申すは、全くこの通り現世のみを祈れと云ふ思召ではなけれども、宿善のない人をして第十八願の眞門へ引き入れんが爲めの御意であります。言葉をかへて申せば方便の現世利益を述べて遂に眞實に入らしむるが爲めであります。時と方便とを以て教化すると申す道理で、元來私共は如何やうに口先では述べて居ても心の根本は現世が好きで、止めよと云ふても停まり兼ねる現世心、それだから我が御開山はその機根に應じて必ず他所の神明や諸佛に追從しお祈りするには及ばぬぞよ、この念佛さへ稱へれば息災延命、七難消滅、あらゆる現世を祈る名號ぢや程に、この名號を唱へよと云ふことを

お勸めなさるゝのであります。何れにしても彌陀の御手を離さすまいの御慈悲である。御當流に流れを汲み乍ら現世の御利益は一向ないやうな御宗旨ちやと思ふと、自然人情として他の神明や權現へ足手を運ぶやうになる、さすれば仲々元の念佛門へ引き戻しにくい、念佛の廓の内にさへ置けば現世祈りの念佛でも數々積りてみれば、念佛には果遂の誓ひがあるから、その果遂のお誓ひにほだされて、ドコゾでは第十八願の念佛になし、現世と志した念佛もやがてはあら嬉しや辱なやと佛恩喜ぶ念佛になる故に、この現世利益の方便から眞實門に入らしむる爲めにこの十五首の和讃を御製作なされたのである。楔を拔くには楔を打ち込まねばならぬ、聲を止めるにはやはり聲を出して止めねばならぬ、壁の損じ

たのを繕ふにはやはり土を用ひるやうに現世祈りをやめさすには現世の利益でなければならぬ、これ方便より眞實門に入らしむると云ふのである。

往昔、平重盛公は世人に念佛を唱へさせようとて小松谷に四十八間の御堂を造りて四十八對の燈籠をしつらへ、四十八人の美女には各白衣を着せ、引接の念佛、屈曲の調子を合せていとも殊勝に同音に念佛を唱へしめられた、そこで世間の人々は初めの中は美女の美音を聞かんものと小松谷へ足を向けた者が今度は美女の眞似をして念佛の唱へ方を流行歌を歌ふやうに唱へ出し、それが次第に緣となりて後には眞實の念佛になつたと申すことである。これぞ重盛公が世人に念佛を唱へさせんが爲めの方便、其方便か

ら遂に眞實の念佛に入つたのは果遂のお誓ひの虛しからざる證據である。斯やうに往昔から方便から眞實に這入つた例は甚だ夥しいことである。今お互ひもそれと同じごとく、初めは現世祈りの念佛ぢやと思ふたに、いつの間にやら他力の念佛になつて下さるゝは皆果遂のお誓ひのあらはれぞと頂かねばなりませぬ。

さて愈、現世の念佛から眞實の念佛になると云ふことを好きな道より導くと云ふことを申しませう。其例は古今東西、甚だ澤山ありますが、あの横川の惠心僧都の時、菅三位文時と申す方は菅相丞の孫で漢和の學問に通達し、當時は有名な俊才、詩文和歌の道はやゝもすると祖父道實公よりも勝れたると云ふ評判の人、それ程の大學者であつたが一向に佛法嫌ひ、因果の道を辨へ給はぬ

それが玉に疵であつた、而し惠心僧都とは詩文の友達で至つて仲よしの間でありました、この文時卿の子息の宰相殿は父とは違ふて佛法を信じ惠心僧都には深く歸依し、無二の念佛者でありました、或時文時卿には大病にかゝられたので御子息の宰相は大に悲み、この世では絶讃の譽れを取り給ふ父上なれども、後生を願ひ給はねば未來は恐しや、三塗の苦みを受け給はん、何とか佛道に導きたいと思召しても根が佛法嫌ひの方なれば引き入れ申すことは出來ず、ちやと申してこのまゝ父をお見捨て申す事は尙更出來ず、如何にしたらよからうやらと思案の揚句惠心僧都に密かに御相談なされたら、僧都には宰相殿のお心を察して早速文時卿のお邸にお出向なされた、この時文時卿の思はるゝには、さては僧都

には、自分の病氣を御存知なく御入來と見へる、病中なれば御無禮乍ら病床にてお目にかゝるべし、お通し申せと、ソコで僧都には病床へお通りなされ、驚きたる顏色にて、御病中と存じたら疾くにお見舞申すべきに一向に存ぜず失禮の段お許し下され、さて今日推參せるはチト御願ひがあります次第なるが御病中なれば叶ひ申さずやと仰せらるゝと、文時卿は折角僧都の御入來、病中にても叶ふことなら申付けられたしと、僧都の仰せに、さればなり他のことに候はず歌を一首詠んで頂きたしと、其とき文時卿はニツコリと笑ふて和歌とあれば日頃好きな道、如何に病中なりとて一首や二首の浮ばぬ筈なし、いと心易き御用、御遠慮なく歌の題を示されたしと云はるゝと、僧都の仰せに、今度觀無量壽經の九

品の圖を描かしめ佛檀に張り其九品の圖には一々歌を添へました所上品より下品中生までは歌も出來ましたが下品下生の一つだけ歌が出來ませぬ、そこで是れ御力を借りたいと今日罷り越しましたと言はれると、文時卿には委細承知しました。而し、其仰せの下品下生とやらの意が解りかねます。其意さへ述べて下されたら御意通り歌を造りますとのこと、僧都はされば一と通り下品下生のいはれをお聞き下されと容ちを改めて下品下生の御物語、これは大聖釋迦如來觀經の御說相で、一生の間十惡五逆具諸不善と說かれて、一生涯殺生偸盜等の身三口四意三の十惡、又殺父母等の大乘の五逆小乘の五逆、を並べ造つた徒ら者、臨終今端の時になると、其平生の惡業が一時に現はれて地獄道え迎へんと奪婆奪精

奪魂等の牛頭馬頭、阿房羅刹、燄々蕩々たる火の車、枕のほとりに現はれ、イザヤ無間地獄の大罪人今來れ、未來閻魔の迎ひなるぞと聲高々呼ばるゝ時、この病人平生なしたる善根なく、功德はなし、佛法信ぜなんだ其報ひ、今や現在身に逼りて七轉八倒、玉のやうなる汗を流し、虛空を摑みて床を探り、騷ぎ苦む其風情、目も當てられぬ有樣、其時枕元で斯くなる上は他の道では助からず、餘の法では參られぬ、唯南無阿彌陀佛の一法ぢや、やれ念佛申されよ、南無阿彌陀佛と稱へられよと宣ふ聲が耳の底に屆くと罪人ハツと心附き、タツタ一聲南無阿彌陀佛と稱へてみれば、稱南無阿彌陀佛稱佛名故於念々中除八十億劫生死之罪と說かれて一聲の所に忽ち八十億劫の生死の罪消へて、今まで見へた火の車は

忽ち變じて見金蓮花、猶如日輪、光り輝く黃金の蓮花となり、目出度往生したとあるのが下品下生の相で御座るぞと語り給へば、これを聞かれた文時卿、歌處でも詩文處では御座りませぬ、初めて承りました佛法の不思議、しみ〴〵全身に應へてきて〴〵有難い御いはれ、下品下生の惡人とは餘人では御座りませぬ、現在この私が下品下生の大惡人、善知識とはこりも直さず惠心僧都、アナタ樣であります。今この御法を聽聞せなんだら恐しや未來永劫無間地獄に墮つる身でありました、畏くも今聽聞いたしましたは我が生涯の仕合せ、疾く〳〵敎へ給へよと、それから發念して遂に佛門に歸し念佛怠りなく目出度往生し給ふたとある。

これで聽聞してみられよ、下品下生の歌を詠んで吳れよとは方

便、誠は佛法へ引入せんの僧都の善い巧み、初めから勸化すること云ふては佛法嫌いの文時卿故に、仲々合點はせられまい、それ故好きな道の歌を詠んで下されと云ひ、わざと下品下生の歌をと題を出してみれば、其下品下生の意はと問はせて置いてそれから勸化せられた、これが方便から眞實に入るのぢや、今各やわれ〳〵も仲々並大抵では御法義に入らるゝ身ではなけれ共、彼尊の種々な善巧方便から眞實に入らしめて下さるのぢやとお受けせねばなりませぬ。

サー、御一同こゝぢや、今惠心僧都の御引合せも好きな道から誘ふて下さる、あの蓮如上人も、喩への好きな者にはお喩へから歌の好きな者には歌の道から、機緣に應じて御教化下さる、それ

でなければ人心の異なること其面の如しで千差萬別の機類ぢやから、仲々一味の信心には本づきにくい、其機々々に應じての御教化故に御法義に入らして貰へるのぢや、今この利益和讃も、現世好きな者に初めから現世祈禱は止めよ、捨てよと云ふては却つてそれに逆ろうが人情故なか〳〵御法義には入りにくい、それ故好きな道なら餘所へ手離さぬやうに念佛に現世の利益がある程にこの南無阿彌陀佛を唱へよと勸めて置いてツイ〳〵お祈りの念佛が報謝の味に變るぞと、澁柿でも初めの中は澁くて喰はれね共、月日が經つと熟して來て甘味が出る如く、初めは現世祈禱の澁柿なれど、果遂の月日が經つと報謝懇念の甘味となる、斯かる御親切な御手廻しからこの和讃御製作の思召し、方便から眞實に入らし

むる爲めぞと、幾度も〳〵有難い御意の程をお受けせねばなりませぬ。

第二席

さて前席に於きましてこの和讃御製作の深重のお思召しのある所は辨じ終りました。次に、圓滿の德號を顯はす爲めに御作りなされたと申すことは、圓滿の德號と云ふことはこの六字の名號、文字はわづか六字なれ共、無上甚深の功德利益の廣大なること更にそのきはまりなしとあつて、一切の功德利益皆籠りた名號故に圓滿と云ふ、圓滿と申すは少しも缺け目のないことを云ふたもので、十四日の月影は大方は圓いけれ共圓滿とは申さぬ、少し缺け

目があるからぢや、十五夜の月影こそ圓月なり滿月である。今もこの六字の名號にドコか少しでも缺け目があり不足があらば圓滿とは名づけられぬ、だから只單にこの名號が未來淨土へ參るだけの利益や功德だけなら決して圓滿とは申されませぬ。世間多くの人は淨土眞宗の宗義は未來得脫の御利益はあるが現世の御利益は少しもないでやゝもすると、未來は佛け、現世は神樣と云ふやうに合點違ひをする人が澤山ありますがそれは大きな方向違ひ、この六字の名號は過去の利益も現在の利益も、果ては未來の利益も皆充ち滿ちたる名號、何一つ不足のない名號ぢやと云ふことを知らせんが爲めに圓滿の德號と云ふ、この甘味を顯はし、念佛は只未來ばかりの御利益でない、現世に於ても斯く〳〵であるぞと六

字の眞價を顯はす爲めにこの和讃を御製作なされたのであります
淨土眞宗が單に未來だけの御宗旨で現世に於ては少しも御利益の
ないと申すのなら圓滿とは申されませぬ、未來に於ても現世にあ
つても御利益あればこそ圓滿と申すのである。我が本願寺も亀山
天皇より勅願所と御定めあらせられたはこれ現世の爲めには天下
泰平の爲め又未來は菩提を願ひ給ふ故にわざ〳〵勅願所と御定め
なされたのである。それ故に上御本山を初め下特許の寺院には御
本尊の兩脇に、一方は、明治天皇の尊像を奉安し、其御曠德を拜
謝し、御菩提を祈り奉る微意、又一方には、畏くも、今上陛下の
尊牌を奉安し聖躬萬々歳、君が世は千代に八千代にと祈り奉る、
毎朝御本山の阿彌陀堂では漢音の阿彌陀經が勤まります。これは

天下泰平祈りの經とある。我が淨土眞宗は一部の人が合點違ひを
して居るやうに未來ばかりの教へでもなく又未來ばかりか得益の
ない御宗旨ではありませぬ。斯かる現當二世に御利益のある圓滿
の御宗旨ぢやと申すことを顯はす爲めに御製作下されたのがこの
御和讃であります。

この意で淨土和讃一部の上を御伺ひ申すと、先づ初めに彌陀の
名號となへつゝ信心まことにうるひとはと、これを宗躰とするぞ
と擧げさせられ、次に誓願不思議をうたがひて御名を稱する往生
はと第十八願に混ずる自力の稱名を誡め、取りも直さず勸誡二門
の思召しを次第を追ふてお述べなさるゝ、それからこの眞宗は正
しく曇鸞大師に由つて純他力の旨を建立すると云ふ意を述べて讃

阿彌陀偈讃を列ねて二十八首をお造り下さるゝ、而しかくなさるゝこと一つの難がある。それは淨土眞宗は人師の曇鸞さんに由つて建立し佛說には由らざるやと云ふ伏難がある。其伏難を遮せん爲めに大經和讃、觀經和讃、小經和讃、正依の三經に由つて建立する旨をお明し下さる、而しまた伏難がある。それは淨土眞宗は曠々たる佛法の大海中に只三部經のみに由つてお開きなさるゝ御宗旨かと、この伏難を遮せんが爲めに諸經和讃があります。故に三部經は淨土正依のお經、其外に繁滿と念佛の利益の充ち滿ちたることを顯はして下さる思召、これで曇鸞樣を指南とし、三經を正依とし、尙諸經に善き念佛故に一宗を建立すると云ふ旨は聞へた其上佛法は國王大臣に附屬す、國王大臣の保護なくしては法の流

通も致し難い、由つて國王大臣の御歸依と、天下泰平の法なることを顯さんが爲めに次に現世利益和讃を御列ね下された。斯く聞いてみればとて今一宗を改めて建立するには非ず、往昔恒河沙劫の昔から傳はる念佛なるぞと、勢至和讃を作つて、過去の勢至、昔に授かる念佛を、今弘通の爲めに法然上人と示現し給ふ、この法然上人より傳はりて一宗建立したりと云はんが爲めに勢至讃を作り、終りに源空上人御本地也と書き了らせてある。これから考へてみますればこの淨土和讃一部の列ねやうは宗旨建立の旨を現はして下さるのぢや、これから推せば現世利益和讃はなければならぬ筈ぢや。さて前に申す如く、この南無阿彌陀佛はかゝる圓滿殊勝の道理ある名號故に我人のやうな徒ら者でも一念信じ奉れば

無始以來の罪消へて忽ち大涅槃のお悟りを開かせて下さる、文字は僅か六字なれども、金剛石の如く小さけれ共無上の寶珠、この名號もタツタ文字は六字なれ共無上の德を具へ、未來は申すに及ばず現在にあつても雨の如く功德は飛び出す、況や吾人の惡業も煩惱も一時に消滅して下さるのぢや。

昔、支那の司馬溫公と云ふ人は幼少の時分から至つて智惠が勝れてあつたが、丁度七八歳の頃大勢の子供と集り野中で一つの大きな水瓶があつたが、其中には水が滿々と湛へてあつた、子供は其水瓶の上に乘りグル〳〵ふちを廻つて遊んで居ただ其內一人の子供が足を外づし水瓶の中へ落ちて了ふた、サア大變瓶は深く水は多し、兎ても角ても遁れる事はならず、外の子供は吃驚仰天、

あら恐しやと皆逃げ歸つて了ふた、司馬溫公は一時は逃げかけたがイヤ待てと踏み止まり、あの子が水の中へ落ちてみすみす死ぬるのを見て逃げるのは朋友の信ならず、あの子も我も成長してみれば竹馬の友と云はねばならぬ、それを見捨てるとは人間の本意に非ず、別してあの子にも兩親あり、自分にもあり、今あの子が死んだなら兩親の歎きは如何ばかりぞ、今救はなんだら友の信義に外づれるぞと、僅か七つの司馬溫公いろ〳〵思案してみたが吾身は幼少なり瓶は大きい、どうしたらよからうと、思案の揚句、瓶を破つて水さへ出せば友達は助かるぞと突差の決斷、たちどころに大きな石を持つて瓶に投げつけると、流石の瓶もサツと破れて水は瀧と流れ出て中の子供は助かつだと申すことである。

これでヨク〳〵考へて見られよ、水瓶と云ふたはこの迷ひの生死の中の如く、水とは日々に起る八萬四千の煩悩ぢや、中に落ちたる子供とは御座の我人に喩ふ、先に逃げた子供とは十方の諸佛菩薩、一人踏み止まつた司馬溫公とは今日拜み奉る阿彌陀如來、各々や我々は二十五有界の水瓶の中に落り入りて念業煩悩の水の中に浮みつ沈みつ、迷ふて居るに、吾が手では何時出て來る時節があらうぞ、從苦入苦、從冥入冥と迷ひを重ぬる身なれども、爰に有難や阿彌陀如來は只獨り踏み止まり一切諸佛の捨て給へるこの悪人女人をわれ助けずんば正覺取らじと案じてみても、縁なき衆生は如何にして救はんと五劫の間思案なされ、漸く思ひを究竟して、我等が爲めに萬善萬行御成就なされ、恒沙の功德を取り集

め給ひたが圓滿の形、形は小さいけれ共六字の小石、今諸衆生と回向して、功德成就と名づけ給ふ故、無始以來の迷ひの水瓶打ちくだき、煩悩の水が流れ終ると佛になることの出來ぬ身が大悲のお慈悲にて生死の苦海を立ち出でゝ、悟りの故郷へ歸る身の上これ皆南無阿彌陀佛のあらはれも右の因縁思ひ合せて南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

斯樣の道理を聞いてみれば、利益廣大の南無阿彌陀佛、文字は小さい石の六字なれども、煩悩破つて佛になるは本願力の不思議と思はねばならぬ。これで圓滿の德號と申すことはお解りでせう

さて第三に、弘願の信者をして彌々信心を增長せしめん爲めに

と申すは、第十八の願文に乃至十念若不生者と誓ひたれど、現世

の利益は誓ひ給はぬ。由つて弘願の信者はこの現世利益和讃を聞いて、さて〳〵有難や第十八願に誓ひ給はぬ現世利益さへあるからには私の往生は猶々相違なし、誓ひ給はぬ現世利益さへあるからには誓ひ給ふた若不生者の往生は疑ふ餘地はないと、愈々他力の信者はこの利益を聞いて未來の得脫は尙々喜ばねばならぬ。其爲めに御製作の御和讃ぢやと云ふ意、斯く三義を立てゝお傳へ申せば、御製作の御意も明かに知られる、然らば愈々聖人の御己證を取紛れぬやう、念佛の御利益は、ワザ〳〵我方から求めぬ共、自然と與へて下さる御利益ぢやと心得て常に大悲を仰ぎ喜ばるゝが何よりも尊いことである。

第三席

阿彌陀如來化シテ　息災延命ノタメニトテ。
金光明ノ壽量品　トキヲキタマヘルミノリナリ。

エー、御和讃の御意を伺ひますに、正しく金光明最勝王經に依りなされての御製作である。この御經は卷數十卷、紙數一百九十枚、鎭護國家の御經である。この和讃は最勝王經の壽量品に依りなされての御製作であります。先づ其御意を伺ひますに、神相菩薩が靜所にまし〳〵て釋尊の御壽命をお考へなさるゝに、八十歳の御壽命と云ふことが解つた、そこで神相菩薩靜所から出て佛に問ひ給ふに、佛は生死自在の御身とあれば、何時々々まで

も生きさせらるゝに、百年も千年も生き給はず僅か八十の御入滅ことは如何なる理由ぞとあれば、佛の宣ふに、幾千年の命を延ばすも自由なれ共、衆生化縁の薪が盡きたる故に今は八十にして涅槃に入るぞと、然らば娑婆に於て長命する法は御座りますかとお尋ねなされたれば、佛のお答にそれもあると宣ふ、其時聲に應じて東方からは阿閦佛、南方から寶性如來、西方から阿彌陀如來、北方から不空如來四方から四佛が現はれ、この娑婆で災を拂ひ、命を延さんとする法は彌陀より外にはなしとあれば、其時阿彌陀如來は釋迦に代りて獅子の高座に登らせられ、金光明經の壽量品を直々お說きなされ、この界で息災延命になりたいと思へば南無阿彌陀佛を稱へよと仰せられた。このお經を只今の和讃に阿彌陀如

來々化してと仰せられた。成程彌陀は壽命を自由になさるゝは尤もである。本來一切諸佛の壽命も一切衆生の命も皆彌陀如來の壽命無量より顯はるゝとある。彌陀は西方に在ます。西方は四大の內風大に當つて風は一切衆生の命である。我人の出入の息は風である。息は命である。由つて梵語では南無阿彌陀佛。漢語では歸命無量壽如來、無量壽とあれば命に限りはない。

然るに世間では正月の元日や或は祝言の席で念佛を稱へると緣起が惡いと嫌ふ人があるが大きな心得違ひと云はねばならぬ。目出度いことを鶴は千年、龜は萬年、千秋萬々歲などと申すが、是等は皆數に限度がある。今念佛は無量壽と申せば數に限度がないこれ程目出度ことがあらうぞ、すれば祝ひ日などには殊更念佛を

唱ふべきである。又世間には魚鳥の肉を口にして目出度と申すが其肉は魚鳥の屍ならずや、口中へ入れるのは取りも直さず葬式である。魚鳥の屍を葬つて目出度と云ひ、生き通しの彌陀の名號を縁起が悪いと申すは沓を冠にして居る類で間違ひも甚しいことでは御座らぬか。

あの近江國の多賀明神は世間では壽命の神として名高い神様でありますが、御本地は阿彌陀如來であります。その昔法然上人のお弟子の俊乘坊重源は後白河法皇より奈良の東大寺の勸進を仰せ付けられたので、兎角壽命が短かくては大事業は成し遂げ難しと多賀明神へ一七ケ日參籠して東大寺建立の間は壽命を延ばして下されとお願ひなされたれば丁度七日滿ずる夜明神が彌陀の形を示

現して莚二枚下されたと云ふ夢から覺められた、これは如何なる理由かと考へらるゝに、莚と云ふ字は草冠りにのばすと云ふ字、すれば二十をのびると書いて莚と云ふ字、二十を延びるが二枚下された。四十年延びると云ふ意味、果して重源は東大寺を首尾良く建立して四十年目に命終られたとある。すれば本師阿彌陀佛は壽命無量なる故に垂迹の多賀明神も壽命の神と現はれ給ふ。何れの道、災を拂ひ命をのばすことは阿彌陀佛の功德にあるから各々もこゝの道理を聞かるゝにつけてもさて〳〵有難き名號なるかな斯かるいはれのある故に私如き徒ら者も直ちにお助けに預ることのありがたや嬉しやと仰ぎ上げては喜ばねばならぬ。

さて斯様に彌陀如來に息災延命の道理ある事を辨じましたが、

まだ其上にいろ〳〵證據がある。あの御開山のお弟子の平太郎の弟平次郎の妻は良人に斬られた其時に現に六字の名號が身代りになられたことは有名な話してある。又佛祖統記の中に順德景と云ふ有難い俗人がありて專ら佛を信じて念佛怠りなき方であつたが或時三部經を書寫して佛恩を報ぜんと思ひ立ち、口に念佛、手に經卷を寫して居られたが折しも眞夏の暑い盛りで餘りの苦しさに後ろの山の峰に登り谷を臨んで涼んで居られると、冷風に當りトロ〳〵と眠む氣がさしたかと思ふと不覺にも身は數千丈の谷底へ墮ち込んだ、ハテ失敗つたりと谷の半途で漸く蔦を握りて身を支へて居るゝと今度は恐しや大きな白蛇が口から火のやうな舌を出して登つて來た、それに呑まれては最早一命はなきものと覺悟し

て居らるゝと件の白蛇は人間には對手にならうとせぬ。順德景はそれでも油斷は出來ず、如何にしようやらと思ふて居らるゝと丁度身は白蛇の上に乘らるゝ位置になつたので其背に乘りて一命を助からうとヒラリと乘られたけれ共、全身スベ〳〵とすべつて身の支へやうがないので懷中から小劍を出して白蛇の背に刺込みそれで五體を支へ漸く上に登られ小劍をも拔き取らず命がけに走り歸り白蛇の餌食ともならず一命の助かつたことは全く如來の御慈悲ならんと早速佛檀に奉拜せる彌陀の尊像に禮拜し、佛前に書寫し奉る三部經を見らるゝとコハそも如何に自分が白蛇の背に刺込んだる小劍が勿躰なくもグサリと三部經の上に立つてある。これを見て吃驚仰天、サテは先刻白蛇と見へたはこの御經でありしか

危き一命を助け下されしこと偏に如來の賜物ぞと、直ちに髻を切り落し出家となり、我名を寺號となして順德寺と名づけ、今現に榮へてあると云ふ佛祖統記の説である。是等も聽聞してみますれば、如來の加被力によつて現に息災延命することは、古今其例は澤山にありますぞや。

サア御同行衆、一應念佛に現世利益のあることを聞くと、先き百より今五十、遠い未來はさて措いて、現世で御利益を頂かうぢやないかと考へるお方もあらうが、それは大きな料簡違ひ、全体南無阿彌陀佛の六字はお互が無始流轉の苦みを遁れさせて、往生淨土の大益を與へんが爲めに御成就のお六字ぢや。現世の僅かな用に用ひる爲めでは御座らぬ、昔の言葉にも鷄を裂くに何ぞ牛刀

を用いんやと云ふ、息災延命とあるは、未來往生の大益を得る程の威德廣大名號ぢや故に、お互が念々稱へさせて貰ふ内に自づから功德が流れ出て息災延命ともなり、七難消滅ともなる、これ求めて得る利益でなくて、求めずして具はる御利益、藁を取るが目的でなけれ共、米を取れば自から藁が具はる如くぢや。されば現世祈禱のみ稱へるのみなら、本願の名號では御座らぬ。本願の名號と打ち仰いで往生治定のお念佛を喜び申せば、自から與へて下さる御利益と心得て廣大なお慈悲を仰ぎませうぞ。この六字は息災延命とあれど、世上の信者を見渡してみるに、結構な念佛の信者に大きな禍ひを受けて居る人もあり、或は不幸短命の人のあるのは不審ぢやと思はる方もありませう。その一段は定業中夭の御

和讃の下で委しくお話しいたしませう。

第四席

山家ノ傳教大師ハ　國土人民ヲアハレミテ
七難消滅ノ誦文ニハ　南無阿彌陀佛ヲトナフベシ

この一首は他宗の祖師によつて、お念佛の利益をあらはして下さるお思召であります。先づ山家とは傳教大師は比叡山を家とし給ふ故に山家と申すのぢや、この傳教大師は御名を最澄と申したが御遷化の後に贈號ありて傳教大師と申すのである。これが日本での大師號の初めであります。次が高野山をお開きなされた空海上人に弘法大師、三井寺を開かれたお方には智證大師、又叡山三

代目には慈覺大師、慈惠僧正には元三大師、根來の興教大師、其後法然上人には圓光大師、近く我が御開山には見眞大師、八代目の蓮如上人には惠燈大師、其内傳教大師が大師號の始まりであります。お生れは近江國滋賀郡、幼少の時から叡山に登り狼猿の中に交りて坐禪觀念せられ、後には支那へ渡り天台山に登り一心三觀の天台の法門をお究めになりました。不思議な事には以前叡山に居らるゝ時に地中から一個の鍵をお拾ひになりました、其後支那へ渡り天台山へお登りなされたが、其の以前天台大師が臨終の時に石の唐櫃を拵へ、其中へ天台の奥義を書いたる澤山の書物を入れ、堅く錠を下ろして仰つるやうには、『この唐櫃は必ず明けてはならぬ、而しこの錠に合ふ鍵を持參した者には、内の書物は悉

く皆與へよ』と、遺言せられた。其後誰一人其鍵を持參する者はなかつたが、今傳教大師が入唐し、昔叡山の地中から拾はれた鍵を合はせてみらるゝと、ピツタリと合ふので中の書物は悉く貰はれ、忽ち天台の奥義を究めさせらて日本へ歸りて天台一宗を開き上御天子様より下庶民に至るまでの御歸依を受けさせられたのぢや。丁度其頃桓武天皇が奈良の都を山城國に御移しになり、平安城こし萬代不易の帝都と御定めになりましたが、叡山が帝都の鬼門に當る。これ神佛兩道で帝都を護れこの事ならん、誰かあの山を開いて佛法を弘むる者なきやこあつたので、傳教大師は恐れ謹み、左ればに候、支那の天台山も王城の鬼門に當り、今の叡山こ能く似通ふて居ります。これ天台の法門を弘通すべき前兆に候。

イザ勅命謹んでお受け仕るべし。こ、斧を提げ杣人をつれて山に入り、

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち
わがたつ杣に冥加あらせ給へ

こ詠じて、虎狼の棲む深山に分け入り、次第々々に切り開いて根本中堂を建立し、藥師如來を御本尊とし、大講堂には大鐘を釣り、西塔、東塔、南谷、横川、黑谷こお開きなされた。天台の法門は山王權現の和光の光りこ諸共に神佛並び耀き、丁度其時が延曆十一年であつたから寺號を延曆寺こ號し、三千の寺門を構へて其繁昌は言語に絶した、斯く明德を具へ給ふた傳教大師ぢや。この大師の仰せなれば、七難消滅の誦文には法華經を稱ふべしこあるべ

き筈ぢや。然るに法華經と云はずして七難消滅の誦文には、南無阿彌陀佛と申すより外はないと仰つしやるのには、能く〳〵の理由のあるべきことなれば、お念佛をお勸めなされたのぢや。他宗の祖師でさへお勸めなされる念佛なれば、まして淨土眞宗の行人は取り分け勇んで稱へさせて貰はねばなりませぬぞや。

さて傳教大師は御自分の天台宗の宗体とする所は法華經なれば、其法華經をこそ七難消滅の誦文ぞと仰つしやる筈なるに、今は左はなくてこの七難消滅の誦文には、南無阿彌陀佛より外はないと勸め給ふは如何なる理由ぞと申すに、元來天下に七難の起るのは上下不和より原因するので、上より下を痛め、下より上を恨む。是れに由つて上下不和なれば、惡鬼邪神横行して其國を徘徊

す、由つて七難が起ることある。然るに國中一統に念佛を申し合せば、諸天善神悦び在まして國を護り、爲めに惡鬼神は畏れかしこみてみ國を去る、すれば自然に七難は立ち消へて天下が豊かになることある。丁度傳教大師の御存生の時、人皇で申せば五十二代の嵯峨天皇の御宇に天下大に旱魃し、又大に雨降りて國民が困苦に陥りたので、時の帝には親しくこの七難消滅のいはれを傳教大師に御下問になりました。この時には今申した理由柄から、只日本國民擧りて念佛申すより外は御座りませぬ、と奉答せられたのである。これを只今、七難消滅の誦文には南無阿彌陀佛を稱ふべしと仰せられたのであります。

この七難消滅のことは傳教大師ばかりでは御座らぬ、安樂集に

も、善導大師の御疏、惠心僧都の往生要集などにも見へてあります。然るにわが御開山が三國の七祖を引き給はず、わざ〳〵天台宗の傳教大師を引合ひに御出しなされたは、如何なる理由かと申すに、これがわが聖人の御卓見で、他宗の人の疑ひを晴らし、宗旨の同行を喜ばしめんが爲めぢや。七高祖の中で七難消滅のことを仰つしやると、御宗旨の人は喜ぶけれ共、他宗からは受合はぬ、それは我家の佛尊しで、七難消滅でなくても、念佛贔負の道綽、善導、惠心、法然ぢやによつて、斯くも念佛に價づける爲めに言ふたものぢやと受合ふ氣が御座らぬ。そこでわが御開山はわざわざ七高祖の中から出さずに、從弟でも親類でもない、赤の他人の傳教大師を連れ出して來て、イザこれを見よ、餘所の宗旨の傳教

大師でさへ吾家の法華經を打ち置いて、念佛ばかりか七難消滅の法ぢやとお傳へなさるゝからは、最早疑ふ餘地は寸分もないぞと七高祖を出さずに傳教大師をお出しなされたのぢや。これで他宗の人々も御尤もで御座りますと悅び、況や御流れの同行は一際御念佛の尊さを知り、いよ〳〵疑ひ晴れて喜ばしいのであります。

第五席

一切ノ功德ニスグレタル　南無阿彌陀佛ヲトナフレバ
三世ノ重障ミナナガラ　カナラズ轉ジテ輕微ナリ

エー、この御利益を現生十種の利益に當てゝみますれば正しく轉惡成善の利益である。この御利益に又二つ、今は轉重輕受の御

利益と申して、重きを轉じて輕く受けさする御利益である。一切の功德にすぐれたると聞けば、ツイ耳立たぬやうなれども、よく〳〵詮じつめてみれば實に傍若無人の言と申さすばなるまい、探してみれば他にどんな功德があるかも知れぬに、一切の功德に勝れたる南無阿彌陀佛とは餘りにも人を呑み込んだ仰山な仰せでは御座らぬか。それだけの理由のある事かと申すに、ザッと數へてみると、先つ南無阿彌陀佛が一切の功德に勝れたると云ふ理由が六通り程あります。一には萬機を選ばざることが勝れ、二には阿彌陀佛はこの世界の衆生に緣の厚いことが勝れ、三には彌陀の佛名が稱へ易いことが勝れ、四には念佛は持ち易いことが餘行に勝れ、五には萬德を含藏するが故に勝れ、六には時機に合流するが

故に勝ると云ふのぢや。

先づ一には萬機を喜ばざる故に勝るとは、一切の功德も美本も躰は勝れてあれ共、兎角人の機を選ぶ、あの初頓華嚴經など圓滿修多羅と申して勝れたことは、この上もない結構な法なれ共、文殊普賢の六大菩薩は喜んで聽聞し、又善財童子は初めから十地へ飛び越へて卽身成佛せられた程ぢやけれ共、而し舍利弗目蓮等の二乘の根機になると、あはれ聾の如く啞の如く、オシやツンボのやうに一句も耳へは這入らぬ、日出でゝ先づ高山を照すの華嚴經の御自慢は結構な菩薩方ばかりの爲めぢや、二乘の下劣は頓と御相手ではない、御利益が普く行き渡りかねる。御利益は菩薩切りで二乘や凡夫の爲めにはならぬ、これ第一に根機を選ぶ、般若は

皆空の法門、色卽是空と談じるけれ共、有に着し相に着する故、亂相の我人は兎にも角にも間に合はぬ。又法華經は甚深の妙經で經王とまで譽めらるゝが、而しこれもやはり機根を選ばつしやる成程法華經は初め方便品より譬喩品の長者火宅の喩、それから信解品に佛の御慈悲を說いた樣子、三百由旬の化城品の樣子まで二乘を導いて大に向はしむるありさま、さては提婆品の八歲の童女の得解から、二十八品この上もない佛の深重を說いた法華經なれ共、これも難解難入と說いて愚痴無智の者は傍へも寄りつけぬ。殊に譬喩品では無智人中莫說斯經とあれば、末代無智の在家止住では香もかぐこともならぬ、斯樣に一切の法は皆機根を選ぶ、或は諸佛の誓願でも布施の行をと誓はれたもあり、忍辱の行、精進

の行、智惠の行、多聞の行、樣々の誓願ぢや。然るに彌陀の五刼の御思案では布施の行を因としたまはねば、貧乏の者も差支へなし。忍辱と云へば瞋恚の者は洩れるであろう、精進禪定智惠と云ふたなら懈怠の者や無智の者は聞くことも叶ふまいが、今はそうでは御座らぬ。十方衆生を悉く助けんと誓ふからには人柄や根機を選んではなるまいと思召して、南無阿彌陀佛と云ふ稱名の願を立てゝ、善人も惡人も智者も愚者も在家も出家も男子も女人も十方衆生、たゞ南無阿彌陀佛を稱へん者を迎はんと誓ひ給ふ誓願なれば、ドンナ者でも信じて稱ふれば御助けに間違ひのあろう筈なく、姿や形を選ばず、根機を選び給はぬ誓願なれば、全く萬機普益の御敎へぢやから、コヽが一切の功德に勝れたる南無阿彌陀佛

の御いはれぞと頂かねばなりませぬ。

さて二には、彌陀はこの世界衆生に縁の厚いことが勝るゝと申すは、總じて佛菩薩と云ふても國々で縁の厚い方もあれば薄い方もある。菩薩の中でも觀音サンはこの世界の衆生に縁が厚い故、觀音堂は諸國到る所に建てられて御繁昌ちやけれど、勢至や普賢菩薩の類は縁が薄い故に、格別に堂もなければ信者もない、同じ菩薩でもこの通りちや、佛でも一切經の中には三千佛名經と申して佛名ばかり列ねてある御經である。其の外佛名のみを説いた御經は數々ある、すれば佛でもドレ程あるものか、數も限りも分らぬ程ましますけれ共、我人は御名さへも知らぬ、漸くにして、釋迦、藥師、大日、彌勒と云ふ御名位か知らぬ。この他の佛の御名

は一向に知らぬ。斯樣にこの世界に縁の厚いと薄いとの差別がある、況や百億の世界ちや、他方で因縁のある佛は他方で御繁昌ちや、今阿彌陀如來はこの南閻浮州で御繁昌し給ふは縁が厚い故に他宗他門の人々も南無阿彌陀佛を知らぬ人はない。これ本願の重誓名聲聞十方、諸佛咨嗟の願に應へたのちや。取りも直さず縁の厚きから起つたのちや、其の中彌陀は稱名の本願、聞其名號と名號のいはれを聞け、聞いて稱へよとある故、この世界は六根六識のはたらきあれ共、耳の利根なる所故に、口で言ふことを聞いて了解するが早道ちや、それ故彌陀の本願は座禪せよ觀念せよと云ふやうな難つかしいことはなし、修行せよ骨折れよと云ふやうなことではない、只名號を聞いて疑ひ晴れて南無阿彌陀佛と稱へよ

と、根機に合ふた本願故に縁が厚い、釋迦も六塵説法の中に聲塵説法として始終口で述べられた。これ耳の利根の國ぢや故に觀音さんの繁昌し給ふのも音聲の自在を得て、二十五圓通して耳根より圓通せらるゝ菩薩故に、この世界に縁厚くして繁昌なさるゝのはこのいはれであります。世間の縁談でも仲介人は金の草鞋を七足半履くと云ふ諺もある如く、けれど縁あれば調ひ、縁がなければ七足半十足半履いても調はぬ。縁があるとタトヒ提灯と釣鐘でも調ふものぢや。今各々が極樂へ嫁入りするに、煩悩具足の我人があの尊い眞實報土へ參ることは、天と地との違ひよりもまだ〳〵大きな違ひ、不似合なれ共而し縁があればこそ如來の方から令へ諸衆生功德成就と往生の荷物、機も法も先様から調べて拵へて下

さるゝ故、似合はぬ縁談も御慈悲づくめで熟談して華やかに蓮臺の上へ嫁入出來るのは、全く本願の御手厚い御縁からぢや。

東京市深川區の油問屋肥後隆太郎氏は、元來九州熊本在の生れであつたが、彼の明治十年の西南戰爭の時、僅か三歳で父に連れられて戰禍を逃れ出られたが、どうした不幸やら父子別々となり全く天涯の孤兒となられた。而し或人の情けに依り、この天涯の孤兒も追々生長し、遂には東京で立派に成功し數多の番頭丁稚を使ふて、店は益々繁昌するばかりであつた。只この人の一つの念願は、西南戰爭に生別した父上に廻り合ひたいの一念のみであつた。或時一人の老人を周旋屋から雇入れたが全くの老ボレ老爺、隆太郎氏の目には面倒で〳〵堪らぬ。この隆太郎氏は至つて短氣

で、時々件の老人を打擲することもあつた。或朝隆太郎氏はこの老人の掃除の仕方が悪いとて大變立腹して、杖で二つ三つ打つたので、老人は其のまゝ部屋へ入りシク〳〵泣いて居るので、妻君が部屋に入り、老人に向ひ、良人に打たれて腰でも痛むのか、兎角わが良人は短氣で召使に強く當る人ぢや堪忍して給はれよ、と詫びると件の老人は泪を流し、イヤ〳〵全く主人を恨むのでは御座りませぬ、私にも一人の男の子がありましたが、西南戰爭の時に生き別れしました。若しその子が生き長らへて吳れるなら、このやうな老體になつて難儀は致しますまいと存じ、難儀するにもその子の事を思ひ浮べて泣き出しますとの話に、妻君はコハ耳寄りの話と我良人に件のはなしをすると、主人は早造老召使を呼び

寄せ色々はなしを聞いてみれば、どうやら父らしく感ぜられる、而し其許が三歳の時に生別したと云ふ吾子の身體に何所か見覺へはないかと尋ねると、ありますく其の子の右の肩には赤い黒子、腰には黑い痣が御座ります。聞くなり隆太郎氏は老人に取り縋りさては日頃尋ね申上ぐる父上にましますか、今日まで一向存ぜぬことゝて、勿体なくも現在生みの父君を杖を以て打ち打擲、この不孝の罪は何と致しませうお免し下されませ、聞く老人も夢に夢見る心地して、僅か三歳の時陣中で見失ふたに、今は無事ばかりか立派に成功して富貴をきはむることの結構さよとて、互に涙に咽んで喜ばれたとある。

僅か三歳位で別れた仲でさへも、父子の縁が厚い故再ひ廻り合

ふことが出來ました。各々や吾々も六度生死の迷ひは果てしがなく、從苦入苦と流轉し、從冥入冥と迷ふた吾等なれ共、彌陀如來と申す父に因緣あればこそ、今度は廻り合はせて頂き、やがては極樂の御證りぢや、これ皆宿善の深厚と存ぜられたら、やれ〳〵有難やと喜ばねばならぬ。

さて第三に彌陀の名は稱へ易きに依つて勝るゝ、總じて他の誦文、例へば陀羅尼等はナル程功德もあらうけれ共稱へ難い、若い頃齒も揃ひ、舌根素直に廻る間は稱へられようけれ共、年を寄りて齒も落ちるやら、語呂の廻り兼ねるやうになると唱へ難いぢや、あの光明眞言など、唵阿吠伽。盧舍曩。麻菩羅。麻尻甚婆羅。々々々。波梨多耶蘊などの文句は、子供や齒の拔けた老人には甚だ

稱へにくい。又一字眞言二字眞言と云ふやうな短いこともあるけれ共、兎角稱へ易いはこの南無阿彌陀佛ぢや。文字は僅かな六字ぢやが其利益の廣大甚深なること、而かも齒に障はる音がない、カキクケコの牙音や、サシスセソの齒音は齒が拔けると言い難い、今南無阿彌陀佛ばかりは牙音もなければ齒音もなく、全く稱へ易い故に三歲の子供も八十歲の老爺でも、南無阿彌陀と片言なしに申される。だから陀羅尼眞言などからみれば、稱へ易く勝れてあると云ふも成程と合点が參るであらう。斯かる理由がある故にわが御開山は八家九宗の其中で大手廣げて、一切の功德に勝れたる南無阿彌陀佛ぢやぞよと仰せらるゝのである。

第六席

一切ノ功德ニスゲレタル等。

前席に於て念佛の勝れたることを三義に分けて申上げました、さて第四に念佛は持ち易きこと餘行に勝るゝといふこと、この念佛は稱へるのに更に行儀作法は入りませぬ、有りのまゝに唱へる易行の念佛である。あの聖道門では佛を拜するに三拜九拜等の行儀があり作法があります。佛前に進むにも心を修め、塗香を執り一つの陀羅尼咒文にも法衣を正し、口をそゝぎ、樣々の法式を亂さぬやうにせねばならぬ。天台大師は四種三昧の法を御立てなされた、所謂常行三昧。常座三昧。半行半座三昧。非行非座三昧。

仲々實地に行つてみれば難つかしいことぢや。この法を傳教大師がわが國へ傳へ叡山を開いて修行させやうとせられた、九十日の間立ちづめで居るが常行三昧、九十日の間坐して居るのが常坐三昧、四十五日坐つて四十五日間立つが半行半坐三昧ぢや。叡山でも一夏で止んだと云ふ評判である。これ末世の下根下劣では勤まらう筈がない、三拜九拜さへ中風患者は出來ますまい、況や四種三昧をやと云はねばならぬ。

然るに今南無阿彌陀佛は行住坐臥を選ばず、時處所緣をきらはず、寐たら寐ながら、起きたら起き乍ら、この身この儘で喜ばるゝがお念佛ぢや。不淨の寐室の內からも只南無阿彌陀佛と稱ふるばかりなれば、天台では非行非坐三昧の念佛と勸め、蓮如上人は

あらたもちやすの名號ぢや、取りやすの信心ぢやと仰せらるゝ、

又歎異抄には

誓願ノ不思議ニヨリテ、ヤスクタモチ、

トナヘヤスキ名號ヲ案ジイダシタマヒテ

と仰せられる、こゝから拜してみれば、この念佛は至つて持ち易きこと餘行に勝れるから、一切の功德に勝れたる南無阿彌陀佛と仰せられたのであります。

さて五には、萬德を含藏するが故に勝るゝ、これわが御開山の御卓見で、この念佛に餘りたる功德もなければ、洩れたる善根もなし、文字は僅か六字なれ共、この六字の内にあらゆる一切の善根功德が含まれてあるのぢや。八萬四千の法門、七千餘卷の經卷

と申すも皆この六字の中から開き出されたのぢやとある。一切經の中にある念佛では御座らぬ、この念佛から流れ出たる一切經ぢや、斯く聞いてみれば八宗九宗は他人と見る由れはない、皆念佛の中から出たものぢや。念佛の中の重々無盡の蓮華藏性起の法を說いたのが華嚴經ぢや、念佛の中の苦集滅度の四諦の法を開いたのが阿含經、念佛の中の諸佛皆空の理を說いたのが般若經、南無阿彌陀佛の諸法實相の十如是の相を說いたのが法華經、斯樣に念佛の中から開いて說かれたのが七千餘卷の經文ぢや。云ひ換ゆれば八家九宗と申すも皆念佛の中から出たものぢや、引きしめて攝めてみれば一個の南無阿彌陀佛、由つて八萬佛法を攝めてみれば七千餘卷、其七千餘卷を攝めてみれば八家九宗、それを攝めてみ

れば三部經、その三部經を縮めてみれば大無量壽經、大無量壽經を縮めてみれば四十八願、四十八願を縮めてみれば第十八願、その十八願を縮めてみれば南無阿彌陀佛の六字ぢや。由つて六字を開けば第十八願、それを開けば四十八願、四十八願を開けば大無量壽經、それを段々開顯してみると遂に八萬四千の法門となる。斯く頂いてみれは一切が皆南無阿彌陀佛に攝まる故に、今一切の功德に勝れたると仰つしやたのである。由つて法然上人は諸行は棟梁緣柱の如く、念佛は屋舍の如しと仰せられた。されば諸行は只一隅を守るばかり、念佛は一軒家、あらゆる功德を引きくるめたるが南無阿彌陀佛ぢや故に、一切の功德に勝れたるぢや。斯樣に道理を聽聞してみれば廣大無邊の御慈悲、かゝる念佛にましま

せばこそ私のやうな徒ら者が濡れ手に粟の摑み取り、賴むばかりで淨土參りとは、全く如來永劫の御手際ぞと今こそ身に泌み渡りありがたや南無阿彌陀佛と喜ばねばならぬ。

斯く聞いて見れば御一同何と思はるゝ、若しこれを他家他門の人が聞いたら、樂屋から褒め過ぎのやうに思ふまいが、親鸞聖人の舌長の仰せ、念佛の中へ怎して八家九宗が攝まるものか、先づ六字の中へ天台宗が攝まらば天晴攝めてみられよ、法華經八軸二十八品、廣博な經文が何として六字の中へ攝まるものか、別して法華經には四十餘年來未顯眞實となれば、法華爾前の御經は方便の經、念佛は尙爾前に攝す、其爾前の念佛に佛眞實の法華經が攝まる道理がドコにあると難ぜぬにも限らぬ。而し明かに攝まるの

ぢや、それは天台法華を攝めると云ふことは、わが御開山の仰っしやつたのではなく、其宗の祖師天台大師の仰つしやつたことぢや、天台大師は阿字十方三世佛、彌陀一切諸菩薩、陀字八萬諸聖教と仰つしやる、これから考へてみれば阿の一字に三世十方の諸佛が籠らつしやるぞと仰つしやる、別に佛の御名を稱へずとも、南無阿彌陀佛と稱へると、三世十方の諸佛が皆籠ることの事ぢや、あの法然上人の御歌に

一聲に三世の佛の名を籠めて
稱ふるうちに稱へぬはなし

又彌の一字には菩薩達が皆籠らせられて、別に南無虚空藏、南無文殊と唱へずとも念佛だに申せば皆籠ることある、又陀の一字には

八萬の諸聖教とあれば八萬の法藏、七千餘卷の經文は陀の一字に籠る、法華經も八萬の法藏の中なればこの中に攝まるのぢや、若し法華經は籠りませぬと云ふならば天台大師はこの句の下に但し法華は除くと書いてありそうなものぢや、畢竟皆攝まればこそ天台大師は斯やうに仰つしやるのぢや。わが御開山は決して御無理は遊ばさらぬ、サー御一同にこれで天台宗も念佛の中に攝まると申すことが合点が出來たであらう。

次に眞言宗は攝まるまい、顯教密教の相違ありて眞言は大日如來の直説なり、龍樹大士南無天笠の鐵洞を開いて大日經を取り出し金胎兩部の曼陀羅、秘密の法、それを龍樹、龍猛、龍智、金剛智、善無畏、不空、一行、惠果、弘法と相續して傳はる眞言は顯

教並々の佛法ではない。然るに顯教の念佛を以て密教の眞言を攝めると云ふことは無理ではないかと難じて來たら何とする、而し能く聞いて下され、これ明かに弘法大師の深意を知らぬ故ぢや。弘法さんは念佛を秘密念佛として高野山に許し專ら彌陀を念ずることが深かつたのぢや。大師入定の御歌に

空海が心の中に咲く花は
彌陀より外に知る人ぞなき

心の花とは證りのことぢや、弘法大師の心の證りは彌陀より外に知らぬとはこれ明かに念佛往生のことを仰つしやるのぢや。別して大師は阿字觀を强調し阿彌陀の阿字で萬事すむ、阿字本不生の理をさとし、阿字の大空一つなり、本も末も、始も終りも阿の一

字に攝まると立てられるのが弘法大師の意由つて阿字の歌にも

元よりも阿字の古里阿字なれば
また立ちかゝる阿字の古里

これから思へば一切の迷ひも證りも皆阿字一つに攝まる、如何にも左様で御座らう釋尊が初めて御教化なされたが阿若憍陳如の大經で是は了本際としてある、この人が初めての御相手の方であつた、すれば御說法最初の御相手も阿より始まる、其後一切經を結集し人が阿難尊者ぢや、されば八萬の法門は阿より始まりて阿に納まりてある。この世界の頂きツマリ有情界の始りは阿加尼陀天地面の底有情界の終りは阿鼻地獄と云ふ、すればこれも阿より阿に納まる我人の五體も一番頂上をアタマと申し、一番終りをアシ

と申し、これも阿に始まりて阿に納まる。されば弘法大師の皆阿より出で、阿に入るからは阿彌陀の阿の字で濟むと云はつしやるが最もな次第ぢや、これで眞言秘密の法門も念佛の阿字に皆籠りますと云ふことが聞こへたで御座りませう。又華嚴禪宗の籠ることは勿論である、それのみならず、弘法大師の能登の吠木山に舟板の名號と申すのが今にも殘つてある、眞ン中に南無阿彌陀佛とあつて、右の方に觀經の光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の文がある、又左の方には極重惡人無他方便唯稱彌陀定生極樂とありますこれ明かに大師の眞筆である、源信和尚はこれに由つて極重惡人無他方便乃至得生極樂と仰つしやつた、定の字が得の字になつてある計りで他に違ひは御座らぬ。心が合へば千里同風と申す類

で不知不識同じ味になつたのでありませう。マア何にもせよ能登の舟板の名號と申して現に只今でも殘つてある、これから考へてみると弘法大師と申す方は頻りに念佛を稱へた方と見へる。あの支那の天台大師も終には觀經を讀誦し、念佛して西方の往生を遂げ給ひ、又慈恩大師も法相宗の明師であつたけれ共、西方要訣を造つて念佛せられ、又智覺禪師は禪宗の龍象と云はれた方なれ共、天台大師の御廟に參詣し其石碑の碑文を讀み、大師でさへ念佛して西方極樂を願はれたに、況やわれ〳〵に於てはと直ちに念佛者になられたとある。これ念佛にはよく〳〵勝れた理由があればこそ、又支那の陶淵明、白樂天と天下に名を轟かした大學者でさへ念佛に歸依し、其他八家九宗の明僧達で念佛門に歸し、西方

の往生を願はれた方は數限りもないことぢや、スリヤわれ〳〵も必ず自力の執心を離れて、この萬德の籠りたる念佛を喜ばねばならぬ。かゝる大利無上の名號なればこそ、一切の功德に勝れたる南無阿彌陀佛ぢやぞとお勸め下さるのぢや。

一休禪師は禪宗の棟梁であつたけれ共、深く蓮如上人に御歸依なされ、念佛三昧の日送りをせられた。或時母上へ送りなされた消息文に、

サトリハ入ラヌモノ、念佛ハ釋迦彌陀ノ本懷ニ候間、今ヨリハ念佛三昧ニナリ給フベシ、宗モ今日ヨリハ一向ニ念佛バカリニテ候

ホトケノ御所樣

と書いて送られ、この御消息は只今でも紫野大德寺に殘つてあるげな、斯樣に聞いてみれば古今東西の明師達、聲を揃へて念佛を絶讃せられ、手を引きようて西方の往生を願はるは、偏へに念佛の勝れた理由があればこそと頂き上げねばならぬ。

第七席　紫野宗判

一切ノ功德ニスグレタル等。

御一同席を重ねて念佛の勝れた數々の義を擧げて申し談じたことで御座る、一切を圓滿する名號故に勝れると云ふ。孟子と申す書の中に、孔子はあつめて大成すとある如く、孔子の門人の中、

徳行には顔淵、閔子騫、言語には宰我、子貢、勇氣には子路と云ふやうに、十哲と云はれる程の豪い人なれども、それでも聖人とは云はれぬ、孔子だけを世間から聖人と云ふのは、この十哲の人の徳を一人して持つて居られたからぢや。物言ふことには子貢子夏がよいけれども、而し一方勇氣のことになると仲弓や子路には協はぬ。又徳實なことは顔回や曾子程の者はないが、而しどの人も皆一徳づゝであつたから聖人とは申されぬ、孔子は是等の人の徳を悉く引つくるめて一人して身に供へて居られた故に、孔子は集めて大成すと申されたのである。今も丁度其通りで布施の徳も智恵も禪定も引つくるめて、一切の功徳が皆六字に備はる故に圓満の名號と申すのである。其他のことは皆一徳づゝであるから圓

満とは申されぬ。古歌に

山々の高根〳〵を傳ひ來て
冨士の裾野にかゝる白雲

他の山々では峰を通る雲であるけれ共、冨士山へ來てみると裾野にかゝる白雲である。これは冨士山の高さを讃めた歌ぢや、されば他の功徳は他では結構な利益のあるやうぢやけれ共、念佛の冨士の山にかけてみると皆念佛、體内の功徳として六字の中に攝まつて了ふ、それを含藏して大利を施し給ふ名號ぢやで、一切の功徳に勝れたる南無阿彌陀佛と申さるゝのぢや、これで念佛の勝れたると云ふことが聞へたことでせう。

さて六に、時に合ふ故に勝るゝと申すは、この念佛は末世亂慢

の時に相應して居る餘の法や餘の功德は末世の時には合はぬ、何事に依らず時に合流せぬ時はそれは廢物同樣ぢや。

何事も時ぞと思へ夏來ては
錦にまさる麻のさごろも

綾や錦は結構な物ぢやけれ共、眞夏の炎天には一向間に合はぬ。聖道自力の法門も釋尊の御時代や、正法の春時分には結構利益を施したか知らねど、末法萬年の今日の眞夏になると時機に合はぬ故に、手から引き離れねばならぬ。然るに南無阿彌陀佛の名號は今日の時機に一番相應して、愚鈍の者も聞信の一念に即生し、障りの深い女人も速かに報土往生が遂げられるとは、さて〳〵時機に相應した御本願で御座りますぞと打ち仰いで喜ばねばならぬ。

この時機相應の南無阿彌陀佛は、私一人の爲めに御成就下された六字ぞと信じて稱へるが何よりの結構である。これを大經には三信とあらはし、觀經では三心と御明しなされ、阿彌陀經では一心と御說きなされた。何んでも角んでも吾身の罪の深きには目をかけず、佛の仰せに從ふて、勅命のまゝに疑い晴れて唱へる人なら、積功累德とお積みなされた萬善萬行、御成就なされた圓滿の德號、あるとあるだけ其まゝながら頂かれるのぢや。斯く疑ひ晴れた一念にありだけの功德を頂いた者が、何の不足あつてか稱へた力で參らうのー、これを稱へて御利益增しませうのー、と計らうて稱へるではない、稱へる者を迎び取らうの御慈悲ぞと信ぜられた一念に、御約束通り稱へるを待たずして頂いた御利益なれば、

寐ても醒めても南無阿彌陀佛と稱へるは、決定なされた嬉しさから稱へるのぢや。稱へた力と添へ物して念佛するではない、生れ付いた其儘で後生に安堵なられた上からは、在家は在家、出家は出家、腹の立つ下からも南無阿彌陀佛、心の散る下からも南無阿彌陀佛ぢや。これお念佛を稱へて現世の爲めにしようでは御座らぬ、七難消滅の誦文にさへ南無阿彌陀佛を稱へるより外はないと聞いても、本願の御約束でない世の御利益さへ斯くの通り、況や私を受取らうの御本願の約束なれば、わが往生は愈々一定と現世の御利益を聽聞するにつけても、わが往生の決定を喜び、寐ても覺めても隔てなく、念佛相續して御恩の程を喜ばるゝが何より有難い。

第八席

三世ノ重障ミナナガラ、必ズ轉ジテ輕微ナリ。

ヱー、三世の重障と申すは、三世に押し渡つて重き罪障りのこと、それが念佛の功力に由つて必ず轉じて輕微と、輕くして下さるぞこの御意で御座る。これに付て不審がある、上の二句には仰山そうに、一切の功德に勝れたる南無阿彌陀佛と、サモすさまじそうに仰つしやつたが、其後に三世の重い罪が輕くなると云ふ利益、如何樣一切の功德に勝れたると云ふ程のお念佛なれば、三世の重障が皆消へて了ふ筈ぢや。それを消へるとは仰せられず、輕くなると云ふからは其後には罪業がまだ殘つてあると云はねばな

らぬ、皆消へてこそ眞實の御利益と云ふもの、殘つて輕くなると云ふ位では殘念なもの、怎うやらこの和讃は大蛇を見るやうな御和讃、出し口は大蛇の首を見るやうでも、尾の方が細い御和讃ぢやと思はれる方もありませう、成程この御不審は最もなことぢや、それぢやから古來から學者方が色々に吟味せられてある、或學者は、これは重の字に對して輕と云ふたもの、ツマリ文字の相對なれば斯樣に罪が輕くなるぞと宣ふは、實は輕いと云ふは消して了ふたこと、世間でも重きに對して無くなつたことを、輕うなつたと申す例が澤山ある。二十貫三十貫の重荷をかついで汗を流して持ち運び、肩から重荷を下ろすと、やれ〳〵嬉しや肩が輕くなつたと申す。これ重荷は肩に殘つてはなけれ共、重いと云ふ言葉に

對して輕うなつたと云ふ如くぢや、又婦人方がお產をせらるゝ、臨月になると身が重うなる、それが首尾よく安產をすると、やれ〳〵嬉しや身が輕うなつたと云ふ、輕うなつたと云へばまだ腹の中に赤ン坊の手や足が殘つてある樣に聞へるけれ共、全くそうではない、赤ン坊は手も足も皆生れて了ふて後には何にも殘つてなけれ共、重かつたと云ふ言葉に對して無くなつたことを身が輕くなつたと云ふ。今も三世の重障と云ふたもの故に、その言葉に對して皆消へて了ふたけれ共輕微と輕くなつたと仰つしやるけれ共其實は皆消滅したのぢやと解釋する人もある。これも最もなことぢや、それでは輕微の微の一字は何とするぞと云へばそれは助字として添へ字ぢや、勅語に一旦緩急と仰つしやる、この緩の字と

同じ意味で助字ぢやと云はるゝのである。

而しこの御和讃は全く左様とは見へぬ、ヤハリ重いが輕くなり微の字ある限りは罪の多くある者が微くなるの御意ぢや、輕微と次第なされた微は添字で重に對して輕と仰つしやつたは必ずしも消へて了ふたとの御意ではあるまい。

全体この御和讃は現世利益和讃と標題しての御製作である、未來の利益を仰つしやつたのではない筈、若し未來の利益ならば一切の罪業が消滅すると云ふことは珍らしからぬ、故に讃には一切の業繫ものぞこりぬ、蓮如上人は無始以來つくりとつくる悪業煩惱を殘る所もなく願力の不思議を以て消滅すると云はれあるが故にと仰せられ、善導大師は利劍卽是彌陀號一聲稱念罪皆除と仰せ

られて、一念の端的に無始生々の罪業はドレ程重くても皆悉く消滅することは疑ひなしぢや、けれ共この和讃は現世の利益を明すが本意にましすから、一切の三世の重障、重い罪や障りをばワザと皆消さず、輕く微く受けさす所で現世といはるゝのぢや。そんなら現世の利益は皆亡びぬのかと云へば、皆亡びて宣しき人は皆亡びるのぢや、其理由は次の和讃を拜してみれば克く解る。卽ち次の讃に流轉輪廻の罪消へて定業中夭のぞこりぬとある。すればこの和讃轉重輕微の御利益ぢや、ワザと罪を殘して輕く受けさせさて次の和讃は罪障皆除の御利益で皆亡ぼして下さる。卽ち二首相由つて現世をなすで、この旨甚深の思召のある所を會得せねばならぬ。斯やうの道理を承りてみますれば、さて〳〵御聖教の一

句一字も粗末にはならぬ、深い思召のあることゝ大切に拝見いたさねばならぬことぢや。

さて現益で重い罪を軽く受けさすと云ふ例を云へば、家屋敷も賣り拂ひ一家離散せねばならぬ程の大厄も、僅かな借金位で濟ますこともあり、一命にかゝはる程の大災難も、一寸した病氣位で濟むと云ふ様な類が重きを轉じて軽く受けさすと云ふもの、全体佛の慈悲と申すものは、只目先ばかりの御利益では御座らぬ、いろ〳〵善巧方便して大災を轉じて災を少くして下さるのぢや。一寸名前だけはお預りして置くが、所は九州の中程の或町に、一人の至つて眞面目な老人がありました。平素から念佛を信じ神佛を大切に敬ふて居つた、或年この老人は伊勢大神宮へ參詣しました

が、元より謹直の人だけに何等不淨に接することなく、至極眞面目に參り下向せられたが、家へ歸るなり長男がコロリと死んだ。其翌年又々大神宮へ參詣したが、これも歸るなり次男が頓死した、二年續いて二人の息子が頓死したものぢや故、世間ではいろ〳〵の評判ぢや。神の崇りであらう、神罰が當つたのぢやと口々に噂をして居つたが、其後警察署よりの取調べによれば、兄弟兩人共東京の恐るべき秘密結社と連絡を執り、吾國民にあるまじき行動を執つて居つたとの事、若し兩人共生きて居つたら親の顔に泥を塗るばかりか、先祖代々、一家親族の顔汚しであつた。それが生きて居つて親や親族に耻をかゝすよりは死んだ方が餘程マシぢや、これ等が轉重輕微と申すのであります。

一寸話は古い、所も支那ぢやが、支那と云ふても今の支那ぢやない、今の支那はやゝもすると朝令暮改、一寸當にはなり兼ねるが、而し昔の支那は至つて眞面目、ウンと買ひ込んでも決して損にはならぬで御話するのぢや。支那の或田舍に親子三人安穩に日暮し、至つて佛法信者の家庭であつた。或年飼牛が一頭の白牛を生んだ、世間からは吉事ぢや、目出度しと騒いだ、が而しそれは徒らにカラ騒ぎで事實は全く反比例で、其年から父親は眼疾が元で盲目になつて了ふた。其翌年又も飼牛が白牛を生んだ、これも吉事の反對で今度は息子の方が盲目になつた。重ね〳〵の不幸で一家は毎日泪の日暮しぢや、其頃大分國内が騒々しいと思ふて居たら兵亂到る所に起り、十五以上の男子は悉く兵役に召集せられ

たが、件の父子は元より召集せらるべき所、身體は達者でも盲目なれば兵役免除となつた。漸く戰亂が終つた頃は召集された者は殆んど戰死し、生きて歸つた者は十分一しかなかつた。而し幸ひにもこの盲目の父子は戰亂の終ると共に、次第に目は見へ出して其後家は益々富貴になつたので、其時初めて白牛の生れたのは吉兆ぢやと申すことが解つたと云ふことである。これ等が轉重輕微の益で、暫し兩眼の失明したのは禍のやうではあるけれ共、一命失ふから見れば結構なことぢや。僅かの間兩眼の失明したのは輕く受けさす、一命助かつて其後家庭が榮へることは重きを轉ずるの御利益ぢや。

重障とあれば吾人の罪は如何程の重みであらう、罪の性は濁つ

た物故に重い、重い物なら沈む道理、由つて罪ある者は地獄に沈むの道理ぢや。善と云へば其性が清らかな物故に輕い、輕い物は天に上る、この大地は輿地と申して、ヒマラヤ山や冨士山のやうに重い物でも乘せて居る、而し至つて罪の重い者は乘せられぬで重罪の者は生き乍ら地獄に墮ちるのぢや。よく〳〵罪が重いからぢや、三千年前の昔印度で生き乍ら地獄へ墮ちたが、提婆の悪人古い英人の印度旅行記を見ると、ツイ近年まで提婆の墮ちた穴が殘つてあつたと書いてある、恐しいことでは御座らぬか、今各々や吾々も地神の骨が微塵に碎ける程の悪業重き身であるけれ共、有難や南無阿彌陀佛を稱ふれば、三世の重障みなながら、必ず轉じて輕微なり、現世の御利益では罪の重きを輕く受けさせ、未來

の利益は悉く消滅して、目出度いお證りとは、やれ〳〵有難やと仰ぎ上げては南無阿彌陀佛と喜ばれよ。

第九席

南無阿彌陀佛ヲトノフレバ　コノ世ノ利益キハモナシ
流轉輪廻ノツミキヘテ　定業中夭ノゾコリヌ

ヱー、席を追ふて伺ひ奉る御和讃の御意、只今の御和讃は現生十種の利益の中では轉悪成善の益で、其中この御和讃は罪障皆除の御利益を御傳へ下されたのぢや。初めの二句には現世利益を顯露の打出してお示し下された。全体この世の利益と申すに二つある、一は總じての利益、二には別しての利益と申

すのは、お念佛を稱へる者でも稱へぬ者でも、信ずる者でも、謗るものでも總じて彌陀よりこの世の利益を受けぬは一人もない。其理由は吾人が今日生活し得らるゝは五穀と錦の御蔭である。若しこれがなかつたら一人も生活し得る者はあるまい、其五穀は元來阿彌陀如來からの賜物ぢや、それは珍らしいこと、この衣食物が彌陀から出たことは合点が行かぬと思ふ人もあらう、けれどこれには歴乎とした證據がある。あの伊勢の田邊に正一位稲荷大明神が御座らつしやる、稲荷とは稲の荷と書いた字ぢや、弘法大師が御會ひなされた時に稲を荷うて御座らせられた故に、稲の荷を負ふて居らるゝ神と云ふ意から稲荷大明神と申されたのぢや。元來この明神の御名は保食尊と申して、天照皇太神宮の伯母様に當

る方ぢや。或時太神宮が弟君の月讀尊を下して保食尊の御機嫌を伺はせられた。そこで保食尊は大層お喜びなされ、何か御馳走がしたいと思召すが、元より島國のことなれば思ふやうにならず、仕方なく口から米粒を吐き出し、それを手の平に乘せてお勸めなされた。これを見られた月讀尊は大いに怒り給ひ、人に物を施すに口より吐き出し不淨の物を喰はすとは無禮千萬なり、と持ち玉ふ劍を以て袈裟切りにして急いで天へ歸り、右の次第を太神宮に奏し給へば、太神宮には氣色を變へて、さて〳〵汝は麁忽千萬哉元より保食尊は五穀の神なれば、喉より出し玉ふも決して不淨ならず、ヤレ〳〵早まつたりと歎かせられた。其後保食尊の五臓からは麥米等の五穀が湧く、眉間からは蠶が出る、兩手からは木綿、

兩足からは牛馬、百姓入用の物は殘らず顯はれたとある。この保食尊とは今の伊勢山田の傍の田邊の稻荷大明神である、されば吾が煖衣飽食、衣食の料は皆この稻荷の御恩ぢや、この稻荷は本地阿彌陀如來にまします、その理由を見つけれは弘法大師ぢや。或時大師がこの稻荷の御前で七日の法施を上げられたら、七日滿ずる夜明神が出現せられた、其御姿は六尺豊な阿彌陀如來で、光明赫々として、空海法施を献ずること過分なれ、併しこの世界の衆生は我を稻荷とばかり知つて本地彌陀と云ふことを知らぬ、汝我姿を刻み本地堂を建てゝ、一切の衆生に稻荷は彌陀と申すことを知らしめよと仰せられた。そこで弘法大師は本地堂を建立し、彌陀如來の尊像を刻みて安置せられた、されば稻荷と申すは即ち阿

彌陀如來ぢや。今時の者は他宗でも眞宗でも、念佛する者でも謗る者でも、彌陀如來より利益を受けぬ者は一人もありますまい。サア御一同や、惣じての御利益とはコゝぢや、これからは別しての御利益を申し述べてみよう、南無阿彌陀佛を稱ふれば、この世の利益きはもなしとあるがこれぢや、御本書の中に、他力念佛の行者に現生十種の利益あり、其心光常護の益あるは諸邪業繫障りなし、冥衆護持の利益あれば惡魔邪神近よらず、これ念佛の御威德で、求めずして現世の利益はそなはるのぢや。

彼の德川家康公が天下の覇權を握り、三百年の基礎を堅められたは、一方から申せば全く念佛の利益である。ナゼかと申すに家康公が十八歳の時、信長と戰爭し利あらずして逃げ走り、遂に手

次寺の三河の大樹寺へ入り、祖先の墳墓の前で切腹しやうとして住持の僧に墓の所在を尋ねられた。其時住持の僧は登譽上人と云ふ豪僧、家康公に喩して申されるやう、盗賊にも等しい戰爭をして、負けたから先祖の墓前で切腹すると云ふものには墓の所在は教へられぬ、今日までのやうな賊に等しき軍は止めて、只今からは念佛を弘める爲めに戰爭せられよ、必ず勝に間違ひなしとて六萬遍の日課念佛を授けられた。これより家康公は甚麽忙しい中からでも矢叫びの音を聞き乍らも、六萬遍の稱名は怠りなかつた。其上黑木本尊と申して只今では東京の増上寺に安置してあるが、惠信僧都作の一體の阿彌陀如來を守り本尊として、肌身離されたことはなかつた。丁度大阪の冬の陣に家康公は茶臼山に陣を取り

天王寺にて合戰の時、眞田幸村の謀に陷り家康公一人となられた、この時大阪城中でも隱れなき勇者、薄田隼人が只一ト討と飛び掛つて來た、家康公は迚もかなはじと逃げ廻られたが、隼人は一心寺の門前にて追付き、鎗を伸べて家康公の眉間を突き馬から落ちられた所をただ一刀に首を刎ねやうとすると、俄かに紫雲が立上り隼人は目が眩み忙然として居る間に、家康公は急いで陣中に逃げ歸り、鏡を出して面の疵を見らるゝに一點の疵跡もなし、不思議なことちやと先づ御本尊に御禮を申さんと、守本尊を出してみらるゝと、アラ勿体なや、黑木本尊の眉間に鎗の跡があつた。これから家康公は彌増に尊信せられ、念佛怠りないばかりか、彌陀より賜りたる天下、六字の利劍で取りたる天下ぞと、六萬遍の日

課念佛の他に、毎日餘暇あれば六字を淨寫して居られた。この家康公の淨寫せられた六字名號が、昭和の今日滋賀縣長濱の伊部町の四居家に傳はつてあり、數奇者間には一時喧しく噂に上つたことである。斯く理由を聽聞してみれば、家康公などが現にこの世の利益を得給ふことは斯の通りぢや。總じての利益、別しての利益、共に御利益厚き念佛ありと頂けば、打ち仰いで南無阿彌陀佛〳〵と喜ばねばならぬ。別して須彌四域經から拜すれば、觀音勢至の二菩薩は、彌陀の勅命を蒙つて日月となりて晝夜を照すとある、されば日月も彌陀の御慈悲と云はねばならぬ。

月も日も西へ〳〵と入相の
かねの教ゆる極樂の道

昔から云ふ日の神は太神宮、月の神は月讀尊、これも本地は彌陀如來、本地迹の違ひはあれど體は一つぢや、殊に日本文化の基礎を堅めて下されたは聖德太子、太子も亦觀音の化身とあれば、一切悉く彌陀如來の御慈悲を離れぬことなれば、南無阿彌陀佛を稱ふれば、この世の利益きはもなしと仰せられてある。

第十席

流轉輪廻ノツミキヘテ、定業中夭ノゾコリヌ
無始以來の罪業故生々世々、十二因緣六道四生に流轉し、或は昇り或は沈み、昇るも沈むも流轉生死の迷ひならざることなし。然るにこの念佛のいはれを信ずると云ふと、流轉輪廻の罪消へて

順次に往生遂げさせて下さるに、何の疑ひのあろうぞと御示し下されたる御和讃の御意ぢや。定業と仰つしやつたは決定業のことぢや、業と云ふものは恐ろしいもので、これをタネと訓じて生死流轉するのは皆業の力ぢや。世間の人は稍もすると業と煩悩とを一つにして居る人があるが、それは見當違ひと云ふものぢや。單に一ト口に業と云へば善にも悪にも通ずるのぢや。本願の名號は正定業で浄土へ參る、一切の善悪は皆業ならざるはなしぢや。而し煩悩と云へば悪業の元になる、煩悩の間では地獄へ墮ることはない。煩悩のみで直ぐに地獄へ墮るのなら、世間に人種は無くなつて了ふ、吾人は一晝夜に八億四千念の煩悩が起きる。其煩悩に由りて悪業を造る、この造る悪業が原因して地獄へも墮ち、六道に

も流轉するのぢやそこで一寸業を造る様子を荒々辯じてみませうあの唯識論には、審慮思、決定思、動發勝思、根本業道とあつて、審慮思と申すは喩へてみれば殺生する者が、今日は殺生に行こうか行くまいかと思案して居る間を審慮思と云ふのぢや。決定思と云ふのは、愈々決斷して殺生に行うと決したのを決定思と云ふのぢや。いよ〳〵行かんと、身口意の三業に顯はれた所を動發勝思と云ふ、これまでが煩悩の位ぢや。正しく殺生場へ行きて魚鳥の生ある者を取り殺した所を、殺生業と云ふ。これが第八阿羅耶識に植へ込み、この殺生の業で早い遲いの違ひはあるが、必ず報ゐあらはねば置かぬ。所謂、順現業、順次業、順後業、順不定業、何時報ふやら分らぬ。米の類は順現業、麥は順次業、桃栗三年柿

八年は順後業の類ぢや、善悪二道に渡つて業の報ふのは斯様のありさまぢや、然るに定業と名づけたものは如何な佛様でも三不能の中の定業不能轉と云ふて何ともすることの出來ぬものぢや、萬德圓滿のお釈迦様でさへ提婆に會はれては石が當りて御足の指から血が流れたことある。これ皆定業ぢやで應身の佛でさへ定業は轉ずることは叶はぬのぢや、然るに今本願の名號南無阿彌陀佛を稱ふれば定業までも除いてこの世では御利益を與へて下され、未來は大涅槃の證りを得させて下さるゝ超世の本願なれば只一心に脇目も振らず、心を落ちつけて手丈夫に喜ばせて頂かねばならぬ。

又報ひにも引業滿業の二つあつて、同じ人間に生れても其果報は千差萬別、其面體の違ふやうに別々の果報、これは皆引滿二業

の然らしむる所ぢや、又華報果報と云ふことがありて、盗みをしたら刑務所に厄介になる、人を殺したら死刑に處せらるゝなどは報ひの花でまだ〳〵これでは業は盡きて居らぬ。やがて三塗へ墮ちて苦患を受けるのが果報と云ふのぢや、この様に業報にも種々様々あるけれども今は念佛の御利益で定業も中夭も除くことあればアラ有難や嬉しやと存ぜられ腹一杯御慈悲の程を喜ばねばならぬ元よりこの南無阿彌陀佛は佛にしたいの六字ぢや故に、命延して爲めになるなら延ばしても下されよう、縮めて御縁になるのなら縮めても下されよう、延すも縮めるも御慈悲次第ぢやと承れば、壽命の長短は氣にかけることはなけれ共、斯う云ふ勝れた御利益もあると聽聞させて下さるのぢや、詮ずる所は佛になると云ふこ

とが聽聞の頂き所である。

第十一席

流轉輪廻ノツミキヘテ　定業中夭ノゾコリヌ。

定業と申すことは前席に於て荒々聽聞に及びました。さて次に中夭とは中折れして不意に命を落すことぢや、世間に申す非業の最後と云ふことぢや、儒學でも云ふことぢや、定業で命終るを天命と云ひ、非業で死するを夭命と云ふがこれぢや、電燈の消へる時間に消へるのが定業で、故障が起つて消へる時間でもないのに消へるのが中夭ぢや、死ぬる時は何時も定業と思ふ人があるけれ共一概にそうも言へぬ。一家の締りも同じこと、完全に戸締りし嚴重に錠前を掛けて置くに盗難に遇ふのなら定業ぢやけれ共、戸

締りを不完全にして置いて盗難にかゝるのなら定業とは云はれぬ吾人も衞生に十分注意して攝生に攝生を重ねて居るのに死ぬのなら定業ぢやけれ共、不衞生タラ〳〵で死ぬのなら決してそれは定業とは申されぬ。中夭ぢや。

瑜伽論の中には三種の死を說かれてある。一には平等死と云ふこれは定業で天壽を全ふして死ぬること。二には不平等死、非業の最後を遂ぐることぢや、即ち中夭のことぢや。三には福盡きて死す。生れつきの福分が盡きて了ふて死ぬるのぢや、私共が胎內へ宿ると一人々々司祿神が生涯の福分を授けらる。而し其福分にも一人々々限りがある。而るに生れてから死ぬるまで其福分を儉約して費せば定業なれ共、血氣にはやり奢りに長じ、金銀財寶を

湯水のやうに湯盡すると授けられた福分も忽ちの中に盡きて了へば、果ては良からぬ分別を起し、其結果非業の死を遂げたり或は刑に處せられたりするのは皆是れ中夭と申すのぢや。

而し儉約は大切ぢやが吝嗇にならぬやうにせねばならぬ。儉約は聖人も好む所又佛法の上でも返す〳〵仰つしやることぢや、この旨承知して福分の盡きぬやう身心を謹まるゝが何より有難いことぢや。中夭の義は荒々辨じたがさて不審なことには、定業中夭のぞこりぬと云ふて愈々除いて下さるゝは彌陀の名號なれ共他力金剛の念佛者にして定業が拔けずして貧乏の人もあり、病身の人もあり、或は不慮の災禍にかゝる人もある。これ等は如何なる理由か、病身も定業、貧乏も定業とあれば念佛者はこれを除かれず

して受ける者のあるのはこの御和讃の思召と相違ずるやうに思はれる。この義は怎うしたものぢやと云ふに、全體この和讃は上の和讃と連續して其御利益を顯はして下さるのぢや、凡夫の淺墓な了簡では、現在に惡事災難を拔くことのみを現世利益と思ふて居るけれ共、佛の御慈悲は三世を通じての御慈悲ぢや、最終の目的は佛果の證りを開かせようの御慈悲ぢや、依つて貧乏の定業を除いていよ〳〵未來を大切にし、御法義も增上するのなら如何にも災難を除いて下さるであらう。又除いて富貴自在になり袍衣斷食に陷り却つて信心が退轉するやうな者なら轉重輕微の益を與へて皆除かずして重きを輕く受けさせて下さるのぢや、されば除くもあり、除かざるもあり、二首並べて頂いてみると佛の御慈悲も解

り、又御開山の思召のある所も合點が行く筈ぢや、つゞまる所僅か五十年の短い娑婆の現益を與へて却つて未來を損じるやうなことがあつてはならぬ故轉重輕微の御利益と申すも佛の有り餘つての御慈悲の然らしむる所ぢや。

叡山の桓舜僧都、これは名高い話ぢやで皆サンも先刻御承知でもあらう、この桓舜僧都は年來無常を觀じ早くから念佛門に歸し餘念なく西方を願ふて居られたが、而して御氣毒なことには赤貧洗ふ如く衣食にさへ差支へて御坐つた、餘りの苦しさに山王權現へ一七ケ日參籠して少し福分を與へて下されとお願ひなされたけれ共何の効驗がなかつたので、これは宿緣のない神と思召し、今度は伏見の稻荷サンへ又一七ケ日の間參籠せられた、すると七日

滿ずる曉に稻荷大明神が現はれて、過去世の業因にて福分なし、而し一七ケ日丹精を抽んずること見捨て難し千石の福を與へんと千石と云ふ札を僧都の眉間にお張りになつたかと思へばこの時何所からともなく、一人の氣品高い老翁現はれ出て、われは山王權現なり、この出家は吾方へも一七ケ日祈願を籠めたれ共ワザと福分を與へざりしは、この出家は今より三年の後には命終りて淨土へ參る身なり、貧苦なればこそ念佛の助緣なれ、徒らに福分を與へては奢りに長じ、念佛も怠るであらうと存じ福は與へずに置きました。早々千石の福を取り返されたしと宣ふた故、稻荷は早速眉間の千石の札を取り去られた。桓舜僧都は夢から覺めて、サメ〳〵と涙を流し、さても權現様の御心慮の有難いこと、福を與へ

て下さらぬのは、私の往生を失敗さぬ爲めぞと、それからは益々貧苦と戰ひ、それを助緣として念佛を喜び目出度往生を遂げられたとある。斯樣の道理を聞いてみますれば、態と與へて下さらぬのも大悲の利益と申すもの、與へて却つて未來の大事を失はゞ小利大損、情けのかけ損ぢや、これから頂いてみれば今時の念佛行者も定業で難儀する者もあり、又貧乏で苦む者もある。除いて却つて未來を失ふ者もある。故に其れを御緣として未來の大事を喜べよの御催促と思はねばならぬ。轉重輕微とあれば、若しや若し如來を信ぜなんだならこれ位の難儀ではあるまいに、其大難を僅か貧乏位で免して下さるのぢやと喜ぶ外はない、未來餓鬼道へ沈んで五百生も千生の間も食物の名さへ聞かれぬ所で苦まねばならぬ者が僅か今生の貧乏位で未來餓鬼道の苦を今生の貧苦に轉じ變つて下されたのぢや、又惡道へ墮ちて湯玉の中に煮られたり焚かれたりせにやならぬ者を一寸した病氣位で帳消しにして下さるのぢや、こゝの道理を聽聞してみれば、湯粥すゝつても青菜嚙んでも餓鬼道の代りぢやと思へば喜び〳〵暮される、難儀な病氣にかゝりても不時な災難に遇ふても、これが地獄の責め苦の代りやと思へば辛抱も出來る、淺はかな凡夫の尺度から考へてみれば心に叶はぬ事も數々あり、悔しや殘念やと思ふことも度々あるけれ共自分が過去の業報を思ふてみれば、人ばかり惡い〳〵と思ふたり吾身は何の因果でやらと愚痴の起　下から直ぐにあやまり果てゝやれ〳〵斯麼ことを思ふことの淺間しや、これ皆過去の業報の現

はれ、やがてはこの苦を夢にして浄土參りさせて下さることと、この世のつらさは極樂を願ふ助縁、憂い辛いは御慈悲喜ぶ手がゝりと存ぜられ、辛いにつけ悲しいにつけ近づく御浄土を待ち受けらるゝが有難い。

第十二席

定業中夭ノゾコリヌ。

段々席を重ねて御取次に及ふ現世利益和讃、除くと云ふに付てお話に及んだが、私共の考へでは此方は怎して居てもよい、只如來の方から現益を與へて定業中夭除いて下さるゝ様に一概に考へて居るけれ共そう云ふ理由では御座らぬ。念佛を稱へ信ずる身になれば、法の力で我心も實體になり品行も昔とは違ふて堪へられ

ぬ所も自分に堪へ、言ひ度いことも自ら謹むやうになる。御法義に入らぬ前なら一寸した爭ひにも刄傷沙汰になり思はぬ罪人になるべき所、それが御法義に入ってからは堪忍出來ぬ所でも堪忍し爭ひが起るべき所も我慢して互に事が納まれば死ぬる定業中夭も自ら拔けて了ふことちや、これ吾心の持ち様一つで定業も中夭も除かるゝのである。

あの熊谷蓮生坊なども昔は關東一の豪の者と歌はれた程武勇の人、それが法然上人のお弟子となられてから無二の念佛者となり自然心も和らぎ昔の短氣も何時とはなしに氣も長くなられた。この蓮生坊が京都から鎌倉へ下られた時丁度途中で津戸三郎に行き逢はれた。津戸三郎は大名のことなれば美々しく行列して金覆輪

に悠然と乗り跨り、下に〳〵と通り掛られた。蓮生坊は昔とは打つて變つて麻の法衣に墨の袈裟、菅笠を被り、フト馬上の津戸三郎を見るなり、忘れられぬ昔の戰友、これは〳〵珍らしや津戸殿ではなきやと聲をかけると、津戸三郎はさも恥を受けたやうに熊谷の面體へ唾をかけ、汝こそ武士の面汚し、戰場にて命落すこそ武士の本意なれ、一命惜みてこの見苦しき姿、見るも汚はしとて散々に辱しめた、熊谷は面を背いて唾を拭ひ取り、涙を流して獨語するやう、やれ〳〵昔の熊谷であつたなら、かゝる狼藉に逢ふて默つて居るべきや、馬上から引き落して眞ッ二つにすべき所、今は法然上人の弟子となり念佛喜ぶ身なれば唾を吐きかけられたとて堪忍すべき所、それに引き換へて津戸殿には勢ひよく行列で

練つて行かれるけれども、今にも命終られたら只獨り黄泉の旅に迷はれるであらう。嗚呼今の熊谷は獨り身なれ共、追附淨土へ參らせて貰へば觀音勢至を初めとして新往舊住の販はしい友達ばかりやれ〳〵嬉しや南無阿彌陀佛〳〵、これを聞いた津戸三郎は身の毛もいよ〳〵立ち、如何樣熊谷殿の申さるゝ通りぢや、今にも知れぬ未來の旅路、この世は僅か五十年、榮華に暮すも風前の灯火、熊谷殿の身の上こそ美しいこと、殊に佛法の不思議か、熊谷程の豪の者、他人に唾吐きかけられながら怒りもせず、自ら拭ひ取ることはさて〳〵心の素直なことよ、我も亦佛法に入らんものと此で津戸三郎も熊谷に教へられて黒谷に行き法然上人のお弟子となり無二の念佛者となられた。御一同、これで御座ります。若し

熊谷が念佛者でなかつたなら、兩人は其場で果し合ひして死んだであらうに、短氣を堪へる氣になつて津戸三郎も發心したのち、若し兩人が火花を散らして死んだなら定業も中夭したであらうに今は念佛者だけで堪へる氣になつたのは取りも直さず中夭が除かれたのである。すれば信者の心掛け一つで定業中夭も除かれるのぢや。

第十三席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、梵天帝釋歸敬ス。
諸天善神コトゴ〳〵ク、ヨルヒルツネニマモルナリ。

これからは現生十種の御利益の中冥衆護持の益を明して下さるのぢや、印度に置きましては昔からの梵天を尊崇することは我國

民が太神宮を崇めると同じ事ぢや、印度人の考へでは此國は梵天の始められた所、文字も言語もあらゆる文化は梵天の作り給ふものぢやと信じて居るのぢや、だから國を總じて梵と云ひ、其言語を梵語と申すのぢや、又帝釋天と云ふは忉利天の喜見城にまし〳〵て卅三天を領すとある。此梵天帝釋が守らるゝ故あらゆる諸天善神が守らつしやるのである。何故斯樣な歴々の神樣が念佛行者をお守りになるのかと申すにこれには三つの理由があります。先づ一つには彌陀の本願に由るが故に、二つには釋梵の祈勸の正意の故、三つには内信心を具する故にと、いふ三通りの由れがあるのぢや、第一彌陀の本願に由る故にとは四十八願の誓ひの中第卅七番目の御誓ひが人天致敬の願である。この誓願の意は甚麽惡人で

も女人でも、南無阿彌陀佛を稱ふれば梵天帝釋の諸天善神が敬はなんだなら我は正覺は取るまいのお誓ひぢや、故に此願成就に應へて諸天善神が晝夜不斷にお守り下さるゝのである。さて第二に釋梵祈勸の正意と云ふは大經にも釋梵祈勸請轉法輪と說かせられて、大聖釋迦如來が正覺を取らせらるゝや否や、其時分の機根を御覽なさるゝに、外道邪見の機類多くしてタトヒ說法すとも利益少く、却つて誹謗の者多ければ速かに涅槃に入らうと覺悟せられた時に、梵天帝釋が頻りに法輪を轉じ給へ、御說法して下されとお願ひ申上げた。其時釋尊は、吾出世の要法は南無阿彌陀佛にあり。この名號を正意として現はれたからにはこの法を信ずる者を守護いたすや否やと仰せらるゝ、岐度お守り致しますとお答へ申

した。これに依つて五十年の御說法を聽聞したとある。この堅い約束があつたから晝夜不斷に念佛者を守ると云ふことぢや、さて第三に內信心を具する故とは、若しわれ等が內心に信心が無かつたなら梵天帝釋守り玉ふ筈なく、世間でも土藏や金庫を大切にするのは何の爲めかと云ふに、其中には大切な金銀寶玉が納めてあるからぢや、若し中には何等の寶が入れてなかつたなら大切にする筈はない、今吾等も、このやうな徒ら者を守るぞよ守護するぞよと云ふは姿や形が大切ぢやで守つて下さるのではない、御回向の南無阿彌陀佛の信心の寶があるから守つて下さるのぢゃ。

儒敎の上から聞いてみれば高天私なし、善を行へば天之に百福を下し、惡を行へば天之に百殃を下すと申して僅か一軒の家庭で

もちや、主人が善事を好んで後生を喜び正直に親に孝行し人間の道を正しく守れば一家親類悪い者があつても寄附かぬ。この家へは皆善人が寄り集り家も繁昌し子孫も榮ゆるのぢや、又一家の主人が悪人で博奕を打つたり大酒呑んだりして悪事を好めば寄る程の者は博奕打ちやら酒呑みやらで一向善人は寄りつかぬものぢや今もそれと同じことで衆生が念佛稱へ善事を好めば悪鬼神は近寄らず、衆生が悪事を好めば善神去つて悪鬼神が力を得て巾を利かすやうになるのぢや。

釋尊御在世に御父君淨飯大王に念佛を御勸めなされた。そこで淨飯大王は御身と他の弟子には尊い法を說くが自分には在家と思ふて念佛を勸めるのかと仰せられた時、念佛の利益を仰せられた

事がある。あの伊蘭林と云ふ毒の林四十里四方あるに、この毒林へ栴檀の芽が一葉出たら忽ち其毒を變じて了ふ、今伊蘭林にも劣らざる一切衆生なれ共念佛を稱ふる者ならば必ず一切の悪を轉じて大慈悲心となして下さる、一切衆生の三毒の煩惱は伊蘭、念佛は栴檀の如くぢやと御物語りなされたことがある。念佛の御利益の廣大なことを仰しやつたのである。今梵天帝釋諸天善神が守らつしやることは、御慈悲の聞へぬ昨日までは伊蘭林の如く、妻や子供の手を引いて悪趣へ歸る身であつたのに、今善知識に依り如來の御慈悲を頂いて南無阿彌陀佛を稱へる身になれば宛然栴檀の兩葉が這内つた如く、體は迷ひの凡夫なれ共心は淨土に住みあそぶやれ〳〵有難や尊やと念佛申さるゝが何より有難い。

第十四席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、四天大王モロトモニ。

ヨルヒルツネニマモリツヽ、ヨロヅノ悪鬼ヲチカヅケズ。

ヱー、この和讃は正しく四天王の守護をお明かし下さるゝ御意ちや、四天王とは増長天、廣目天、毘沙門天、持國天のこと、この四天王は須彌の半腹四天王に住す、この須彌山は四方に四つの寶で飾らる、東は白銀、南は瑠璃、西は赤珠、北は黄金、斯やうに四寶を以て所成せらるゝのちや、古歌に

東白南は青く北は黄に
西くれないに染色の山

この四天王が念佛行者をお守りなされるのに三つの理由がある。

一には身の威光を増す。この四天王が念佛の行者を守り玉へば御身の威勢が盛んになり、而かも天光赫々となるに依つてお守り下さるとある。二には離業得道の故に、この四天王も體は凡夫で三界の迷ひの中にまします故に、今の身の上は御威勢が盛んであるけれ共、業が盡きて了へば順後業に引かれて又六道流轉に止まり五衰退沒の憂へがまします身の上なればこの難を遁れん爲めに念佛の行者を守り玉ふのちや、すれば自然に悪業の順業を遁れ順次の往生を得らるゝ故にお守りなさるとある。さて三には内信心を具する故、このことは前に委しくお傳へしたで今は略することにいたす。この四天王は一切衆生の善悪を取締る役人頭ぢや、毎年二季の彼岸には須彌山の頂きに圓生樹と云ふ樹木がある。其下に

中陽院と申す役所がある。これへ梵天帝釋、諸天善神、炎魔法王四天王が寄り集まりて一須彌世界の善惡を訂さるゝのぢや、其正し方は一毫の誤りはないとある。其善惡の總取調をするのが四天王の役柄である。今念佛行者がこの四天王に守らるゝと申すことは能く〳〵の仕合せごとぢや、喩へてみれば梵天は一國の主權者の如く、帝釋天は總理大臣、四天王は司法大臣、閻魔王は警視總監、俱生神は刑事部長のやうなものぢや、今念佛行者は一切の罪を調べる方に却つてお守りに預り晝夜常に守るとあるはさて〳〵有難い仕合せ者と勇み喜んで念佛に元づかねばならぬ。

さて四天王の御守護に依り萬の惡鬼を近付けずと。如何な惡鬼も念佛行者には近寄ることさへ叶はぬと云ふのぢや、今萬の惡鬼

と仰しやるが、龍樹菩薩から頂いてみれば惡魔の數は實に六萬七千二種類とある。其中には四ケの首を持つ惡鬼も居る。東に住するを青鬼と云ひ、南に居るを赤鬼、西を白鬼、北を黑鬼と云ふ、東に居る青鬼と申すは百姓の嫌がる鬼で五穀の未熟を好む鬼ぢやこの青鬼が横行すると不作飢饉に陷るのぢや、南に住す赤鬼は火事を好む、西に住む白鬼は喧嘩を好む、北に住む黑鬼は俗に云ふ貧乏神のことぢや、素より貧乏神のことなれば世間一般から憎まるゝ惡鬼ぢや、この青白黑赤の四つの鬼が六萬七千の惡鬼の司さである。これを抑へるのが四天王の役目ぢやとある。故に四天王の像を見るとこれ等の鬼を抑へて居らるゝ、東の青鬼を抑へるのが持國天、黑鬼の貧乏神を抑へるのが毘沙門天、世間に毘沙門天

を七福神の中へ入れるのはこの貧乏神を抑へ玉ふからぢや、さればこの悪鬼共が四天王を見ると影を隠して逃げ回る、頭分の鬼さへ恐れるのであるから其他の子分の鬼共はバラ〳〵と逃げ回るに違ひない、依つて四天王に守らるゝ身になれば萬づ一切の悪鬼は近寄らぬと云ふことを四天大王もろ共に晝夜常に守りつゝ、よろづの悪鬼を近づけず、斯く聞いてみればこの御讃のお心も聞へたであらう。而しこの守り玉ふと云ふも只空念佛や名聞人並の念佛では御座らぬ。信心具足の南無阿彌陀佛ぢやと云ふことを忘れてはならぬ。

其昔、三井寺と叡山とが爭ひを起して散々三井寺側が敗北して山門の爲めに燒き亡ぼされた、其中一人の三井寺の僧が大津邊に

隱れ住んで居つたが或夜の夢に威御ある神が弓矢を携へて來られた。何人にましますと尋ねると、我こそは新羅明神也、三井寺を守護するものなりと仰しやる。其時件の僧明神を恨んで申すやう三井寺を守護するとは口巾廣き仰せかな、此度三井寺は山門の爲めに燒き亡ぼされ散々の敗北、新羅明神ならば何ぞ守護し玉はざるやと、申上ると其時明神の仰せに、我は三井寺の大衆の菩提心を守る者なり、今度の兵火に依り三井寺の大衆の中にはそゞろ無常を感じこの世界を厭離する者多し、我はそれを喜ぶ者ありと仰せられたと近くは諸神本懐集の中にも出てあることぢや、すれば今守ると仰せられたは身や心が尊いから守つて下さるのではない如來廻向の大菩提心の信心のある身上なる故にお守り下さる、不

信心の輩を守り玉ふのではない、この御いはれをよく〳〵合點して我人一同に如來の御慈悲に本づかせて貰はねばならぬ。

第十五席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、四天大王モロトモニ等。

前席で荒々お咄申す如く、念佛行者をば四天大王は夜晝不斷に御守り下さるゝことは有難いことぢや、而し一寸此に不審のあるのはこの御和讃に守るぞよ〳〵とあれども確かに守つて下さるのであらうか、現前に守りて下さると云ふ證據でもあるのかと申すに古今著聞集と云ふ書物の中に書いてあることぢやが昔大原の良忍上人、天元中に初めて融通大念佛を御開きなされて盛んに念佛をお弘めなされた。この念佛に歸依する人が多かつたので記銘帳を

作つて一々名前を記された。程なく五十三人が記帳せられ、五十四人目に青衣の僧が來て私も記銘帳に付けて頂きたいと申さるゝ故に、御名は如何にと尋ねらるゝと、件の僧は私が自書しますと申す故其帳面を渡さると、何か二三の文字を書いた後でわれこそは鞍馬寺の毘沙門天なり念佛結集の爲めに來ると申して搔き消す如くに去られたとある。良忍上人怪んで帳面を見らるゝと右の通りに相違ないものだから大變喜ばれ、さては自分の勸むる念佛が四天王の御意に叶ふたか、わざ〳〵念佛を守る爲めに御出で下されたかと喜んで其から益々念佛を勸められたことある。其後九年を經て鞍馬寺へ參り毘沙門天の寶前に通夜し念佛して居らるゝと、夢とも現ともなく、毘沙門天が現はれて汝念佛の行者を守ること

我のみこのみ思へるか、諸天善神は悉く稱へる念佛を受け玉ひて影の形に添ふ如く守り玉ふぞ、されば其諸神の記銘帳を授くべしと一册の帳面をお渡しになつた。良忍は夢の中にあり乍ら大に喜んでやがて覺めらるゝと、手元に一冊の帳面が殘つてあつた。開いて見れば、奉請念佛百遍梵天帝釋無量の諸天等、奉請念佛百遍初禪三禪四禪の諸天無量衆等、奉請念佛百遍日月二十八宿等、奉請念佛百遍龍樹等の弘經大士三千七百八十二人晝夜に念佛の行者を守護し玉ふと云ふ事が書いてある。現にこれは大原の南坊に殘つてある。これを御覽なされた良忍上人は大に喜んで益々念佛を傳へ玉ふたことある。これから聞いてみても四天大王諸天善神のお守りと申すことは確かなことでは御座らぬか。

時は昭和九年八月三十日の午後九時五十分滿洲はハルピン驛發新京へ行く列車が丁度十時半頃家里驛附近まで來ると、急に匪賊の爲めに列車は顚覆された。群をなす匪賊共は一齊に列車へ襲ふて來た、元より乘つて居つた警護兵は各部署に就いて應戰したが何を申しても多勢に無勢、大分日本人も人質としてつれられて行つた。其中に吉林公署ハルピン駐在員村上久米太郎氏外十人ばかりの樣子が一寸も判らぬ。丁度村上氏等は五六十人の匪賊に連れられ高粱畑や滿洲名物の泥の中を食はず呑まずの體で歩かされ三日目に松花江の岸に着き、ジャンクの上で夜を明し、其翌日は三尺程もある深い穴の中へ入れられ、匪賊共は代る〳〵喉元へ鐵砲を當てゝ番をして居る。村上氏を初め一同の人はもう最後の決心

をして居られたが、この時日本の救援隊のボートやら空には飛行機が來たので、匪賊共はこは協はじと又舟に乘せて柳の木の下へ隱し一同に向ふて一寸でも聲を立てたら直ぐに殺すぞと命令を下した。助け舟が近所へ來て口々に大聲で日本人は居らぬか〳〵と呼んで居る。元より聲を立てたら殺すと云はれて居るものだから誰一人聲出す者はない、この時村上久米太郎氏の耳元へ日本の神様の御聲、そうぢや金比羅の御聲であらう。助かる呼べよと響いたやうである。間一髪村上氏は我を忘れて日本人は此所に居ると呼ばれた。賊彈は村上氏へ集中した、けれ共この一言に依つて一同の者は虎口を遁れて皆助かつたのぢや。斯くして大勢の生命を助けた村上氏は、こは全く私の力に非ず日本の神の力ぢやと深く

感謝せられたことぢや、今念佛の行者は一體や二體ではない、四天大王手を揃へてお守り下されるのぢや、斯く聞いてみれば、私も念佛稱へてお守りに預らうと現世の利益のみを思ふて念佛を稱へるのではない、お念佛は其位の小さい利の爲めに出來上つたのでは御座らぬ。後生の一大事、未來佛になる爲めに出來上つた南無阿彌陀佛ぢや、それを只現世の爲めのみと履き違ひせず、聞其名號信心歡喜の有難い同行となり、其上あら有難や南無阿彌陀佛〳〵と御禮報謝に稱へるならこの念佛は未來の御用ばかりぢやない、善根功德が溢れ出て現世の利益を與へ諸天善神も手を揃へてお守り下さる、求めずして現世の利益を得る念佛ぞと心得ての上からは行住坐臥に御恩の程を思ひ出して、やれ嬉しや尊やと喜ば

るゝが有難い。

第十六席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、四天大王モロトモニ等。

ヱー、段々席を重ねて聽聞に及ぶ現世利益和讃、四天大王御守護のことは荒々辯じ終つたことぢや、而し今少しく金神のことを御傳へしたいと存ずる。世間では金神を怖れて、今年は何れの方に金神さんが居られるから此方へ建築したりすること祟りがある。病人が出來るなどゝ騒ぐ人があるが、今念佛の行者は金神さんを忌まねばならぬか、又忌まずとも良いかと申すに一言で云へば先づ念佛者には金神祟ることなしと云ふべきぢや、其故は金神は邪神の類であるから四天大王がお守りなさるゝ念佛者へは祟ること

は叶はぬのぢや。

佛祖統記と申す書物の中に、唐の智覺禪師は禪師で歴々のお方であつたが、曾つて天台大師の御廟へ參詣せられ其碑名を讀んで發心し斯かる尊い天台大師でさへ觀無量壽經を讀み念佛を稱へて西方の往生を遂げ玉ふからは吾も念佛に歸しようとてそれから自行化他專ら念佛ばかり稱へて居られた。或年自分の庵で念佛の功德の廣大なことを講釋せられたら四方から澤山の道俗が集りて聽聞せられた。あまり澤山の人ぢやで不淨場に不足を告げ幸ひ庵の北東に空地があつたので其所に不淨場を設けられた。或日御講釋が終つてから四五人の所化がブラ〳〵出掛けると道に大川がある其堤の上に背の高さ一丈ばかり髪も亂れ、痩せたる身なれど爪な

ご長く延ばし眼の光は鏡のやうに鋭く、斯様な怪物が七人連れで川水で頭を洗ふて居る。所化衆はこれを見て大に吃驚せられたが其中一人の所化はこの怪物に向ふて汝等は何者ぞと尋ねられると彼の怪物は我等こそ七金神なり、毎年塞がりの方に住む者ぢや、今年は北方が塞がりで其方に住んで居たら毎日々々大小二便の不淨物をかけられるので只今それを清めて居ますのぢやとのこと、それは奇なことぢや、塞がりの方に普請すると金神は祟ると申すに何で祟りをなさぬのか、イヤ尋常の人間なら祟りも利きますが念佛行者には祟りは利きませぬ。然らば汝等は不淨場から少し動いたら怎ぢや、左様後へ退けば宜しいけれ共私共も過去世の業報に依つて斯様な邪神となつて居りますで日々悪業は増長するばか

り、而し大切な念佛のいはれを聞きますとやがて未來は善所に生れます故不淨を厭はず聽聞して居ります。然らば少し進んで住めば如何ぢや、イヤそれも叶ひませぬ。念佛の御説法が初まりますと梵天帝釋等の諸天善神御廻向なされ少しも私共の居所より動くことは出來ませぬと申した故、件の所化衆もさて〳〵念佛の尊いことゝ感心せられたと書いてあります。これから考へてみれば念佛行者には金神も祟られぬと云ふことがお解りになつたであらう

それに付て御一同、此に一つ心得誤りしてはならぬことがある佛法を大切に思ひ其上御宗旨に疵つけぬやうに王法を守り世間通途の義に逆らはぬやうにせねばならぬ事がある。わが御宗旨では金神の祟りは御座りませぬと云ふて諸神を侮るやうな振舞があつ

てはならぬ。タトヒ金神の祟りはなくとも過去性の宿業に依って甚麼災難に遇ふやら解らん。そんな時には他宗の人から、それみられよ、宗旨自慢して居つても塞がりの方へ普請する故に金神の祟りで禍が續くのぢやなど言ひ囃されると金神の祟りや咎めではなけれ共而しそれでは御宗旨に疵がつくと申すものぢや。それでは人間の有様にまかせて世をすて世の御化導に背くことになる。只世間通途の儀に順ずるのが有難い同行と申すのぢや。

泉州堺市の向原寺と云ふお寺から方違ひのお札と申すが出る。世間ではこのお札が大流行、塞がりの方に普請でもしたいと思ふ人はわれ先きにとこのお札を貰ひに行く、このお札さへ張れば祟りがないと云ふのぢや、拙僧は不審に思ひ、其札の中を驗べてみ

たら、成程祟りのないのも道理ぢや、札の中味は迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北の四句の文が書かれてある。これから見れば金神も祟りやうがない理由、凡夫が迷ふて居る故に東ぢや西ぢや北や南と思ふて居るけれ共これ皆迷の執着と云ふもの、十方空と悟つてみれば西に西の相なく、東に東の相なく、本來無東西ぢや、何ぞ南北四維の別があらうぞ、北塞がりと思ふから北が北になるのぢや、北隣りの人から云へば吾家の北は隣家の南になる、西から見れば東になる、すれば北でも南でも定まつたことはないのぢや、それを是非南北と定める故に北塞りで金神の祟りを受けると塞ぐやうになる。本來無東西とみれば金神も祟らうと思ふて來てもこの文を見れば祟りやうがあるまい、斯麼僅

かな誦文でさへ金神も祟れぬとある。況や眞實の御信心に本づき念佛申す聲につれて諸天善神がお守りなさる上からは金神も祟りやうがあるまい。斯く聞いてみれば愈々頼もしき信心決定の身の上、他宗他門の物忌みする人さへ方違ひのお札を張ると祟りがないと申すに況や御宗旨の念佛者には金神も恐入ることあれば何たる御不思議の御恩ぞといよ〳〵御慈悲の廣大なことを仰ぎ奉らねばならぬ。

第十七席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、堅牢地祇ハ尊敬ス。

カゲトカタチノゴトクニテ、ヨルヒルツネニマモルナリ。

正しく地神の守護を明し玉ふ御和讃ぢや、この地神と申すは大

力の神さまでこの須彌世界を頭の上に載せて居らるゝ神ぢや、僅か日本だけを戴くでさへ仲々ぢやに、全地球を頂いて居らるゝとは仰山なことぢや、釋尊御在世にこの神が御說法聽聞に御出なされた、大變色の黑い方ぢやで阿難尊者も屹驚して世尊に向ひあの方は誰人にましますと尋ねられると、釋尊の御答に、あれこそ堅牢地祇なりと仰せられた、そこで釋尊は右の地神を呼出して汝この世界を頭上に載せて居ることは甚だ重く感ずるやと仰せらるゝと決して左樣には感じませぬ。丁度薄紙一枚程にか思ひませぬ。而し五逆の罪人や誹謗の惡人が道を通ります時には惡業の重さには困りますと申したので、釋尊然らば南無阿彌陀佛を世界に廣めると五逆誹謗の罪人でも一聲に無量の罪を消すことあれば自然汝の

肩も休まるであらう。然し其代りに念佛の行者を守護いたすかと宣へば、地神は大層喜んで必ず念佛行者は晝夜不斷に守護しましようとお誓ひ申した。この理由で念佛の行者は地神の守りに預るのちや、私共も今までは地神の肩を苦めた身の上ちやけれ共、今度念佛稱へる身の上となれば自然と惡業煩惱を滅ばして下さるゝ故晝夜守りづめにして下さる地神の肩に寢起して命の終り次第にお待設けのお淨土へ參らせて頂く身とは何たる仕合せ者やらと喜ばねばならぬ。

この地神の本地を尋ねてみれば不動明王ちや、大力の司さと云ふのも合點が行きましよう。地神と不動とは本地垂迹の違ひはあれど其體は一つちや、だからこの不動明王の仲間衆が皆總掛りで

守つて下さる、愛染明王、烏樞沙摩明王、軍陀利夜叉明王、威御明王、孔雀明王など皆手を揃へて念佛の行者を守つて下さるのちや、俱利迦羅大龍王經の中に珍らしいことが出てある。大日如來が始めて成等正覺なされた時百億世界の梵天、帝釋、四王天、天龍、八部皆集つて來たが其中色究竟天の魔醯修羅王がまだ出て來て居らぬ。そこで大日如來は使者を遣はし早速參るべき樣に申送らるゝと、魔醯修羅王は仲々承知せぬ。三千世界は吾領分なり、其領分で成佛したのなら先方より當方へ挨拶に來るのが當然、それに引換へて此方に來れなどゝは不屈千萬と丁度三度まで使者を立てられたけれ共仲々承知せぬ。そこで大日本如來は今の間に降伏して置かねば來世まで佛法の妨げになるべしと思召し、不動明

王を討手の大將とし右には帝釋天、左には梵天、先陣には八大龍王、愛染明王、孔雀王など各軍旅を調へ勇ましく出陣せられた。

この有様を魔醯修羅王の斥候兵が見て馳せ歸り斯く〳〵と告げたけれ共修羅王は一向に驚きもせず悠然と構へて居る、寄せ手の軍陣は次第〳〵に近づき來り鯨波の聲は間近に聞ゆるやうになつた修羅王の眷屬共はそろ〳〵喧ぎ出し早々出陣し給へこうながせど修羅王はまだ驚きもせず、寄せ手の大將は何人ぞや、さればに候不動明王の旗印に候と申上れば、修羅王は初めてさては面倒な者が出て來たぞ、待て〳〵彼等佛法者は不淨の香ひを忌み嫌ふ者、我に奇計ありとあらん限りの不淨物を集めて城の内外へ蒔き散したた、斯くとも知らぬ不動明王は一時にドツと攻め寄せたれば、城

の内外は不淨物ばかりぢや、如何な明王もこれには困り果て如何にしたらよからうと、暫し逡巡して居られたれば、烏樞沙摩王踊り出て、この不淨物の始末は私が致しましようと目たゝく間に清められた。禪宗や眞言のお寺へ參ると雪隱の傍らにこの明王が安置せられてありますが、この故事から來たのぢや、これを御覽じた不動明王や諸天は大層喜んで其勢ひに乘じ城中へ攻入られたら流石の修羅王も降參し、それから大日如來の御前へ伺候したとある。斯やう勢ひのある不動明王が堅牢地祇と現はれて念佛行者を夜晝常に守つて下さるのぢや、然らば念佛行者には惡鬼羅刹の類も近寄れぬのも道理である。

又堅牢地祇が大黑天と現じ玉ふと云ふことは傳教大師の大黑儀

式に出てある。すれば不動明王が地神ぢや、地神が又大黒天となつて衆人に福を與へようの誓ひぢや、太閤秀吉がまだ松下嘉平次の所で丁稚奉公して居る時主人嘉平次の三面の大黒天を盗み出して家を出で、大黒天に向ふて御身は千人に福を與へようこの誓ひがあるそうだが、萬望私には千人萬人に勝れ日本中を下されこ祈願せられた、果して其祈願通りに關白の位まで登り威光は朝鮮にまで及んだ、この大黒天は只今京都の大佛さんの頭の中に納めてあるこ申すことぢや、されば念佛行者は大黒の本地堅牢地祇に守らるゝこあるからは求めずして現世の福御を與へて下さることは無論のことぢや、其本體の不動こ云ふのは阿彌陀如來ぢや、依つて善導大師は阿彌陀様のことを一坐無移亦不動こ仰しやつた、盤

石に乗らるゝは法身の常寂、火炎に似たるは盡十方の常光、右の手の劍は名號、これで善導様は利劍即是彌陀名號こ仰しやる、左の手の繩は攝取の形、我人を攝取の光明でからめ取り淨土へ迎へようのお姿ぢや、斯く頂いてみれば不明卽ち彌陀如來、堅牢地祇も大黒天も皆彌陀の内證から垂迹し玉ふお姿ぢやで、今彌陀の御慈悲に本づき念佛する身になつたなら影の形に添ふ如く晝夜不斷にお守り下さることはやれ〳〵有難いこ稱へ上げては南無阿彌陀佛〳〵。

第十八　席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、難陀跋難大龍等無量ノ龍神尊敬シ、ヨルヒルツネニマモルナリ。

八大龍王の守護を明して下された御和讃ぢや、難陀跋難と云ふ二毫は互ひに兄弟中で須彌山を七回りに圍ふて頭を伸べると十萬餘旬の頂き忉利天まで屆くと云ふ滅相もない大きなものぢや、あらゆる畜生の中でも圖抜けて大きい姿の持主ぢや、世間には鳥畜類の動物の種類は隨分夥しいことぢやが、自分々々の業感で或は長く或は短く、大なるあり小なるあり種々ぢや鳥類の大きなのは恐らく金翅鳥であらう。羽の先から先までの大きさは三百六十餘旬とある。小さい國は片羽の下に隱れる位ぢや、一食に五百の小龍と一尾の大龍とを食すことある。魚類の中では私共は鯨が大王ぢやと思ふて居るが怎うして〳〵、まだ〳〵大きいのが摩竭大魚と云ふ魚類が居る。大海の水を呑む時には水が逆卷くことある。すれ

ば魚類では摩竭大魚、鳥類では金翅鳥、獸では八大龍神、これ等が動物界では大きい王様や、又小さい方から云へば蚤虱、モツト小さい方では蚊の眉毛に巣を作る黴菌もある。蝸牛の角の間に國を構へて戰爭すると云ふ何百倍の顯微鏡でも一寸目に入らぬやうな虫も居る、然るに只今の八大龍神は大身で而かも善龍ぢやから釋尊の御說法にも親しくお參りして聽聞し、又過去七佛の經卷も龍宮に安置して此上もなく佛法を喜ぶものぢや、其上念佛行者を守るのぢや、而しての難陀跋難の兄弟龍が念佛行者を守ると云ふは理由のあることぢや、あの釋迦如來が四月八日御母摩耶夫人の右の脇から御生れあらせらるゝと、其まゝ四方へ七足半分づゝお歩きなされて天上天下唯我獨尊と仰しやつた。その時この難陀跋

難の二龍が現はれ湯と水とを持參して產湯としてお洗ひ申し、其後へ八功德水を椀に盛つて、やがて三界の主となり一切衆生の供養を受け玉ふ御身が先づ吾等の御供養を先きにお受け下されるやうにと御誕生の時を待ちかねて參上仕りましたと、佛は頭を振らせられ、汝等折角の供養なれ共受け難し、其體龍の身なれば瞋毒盛んなり故に其供養は受難いと仰しやると、イヤ〳〵過去七佛の時にも產湯をかけまして其後にはこの水を供養申したのです是非お受け下されと再三お願ひするので、然らば自分の申出を受得するや、ハイ如何樣なことなりともお受けいたします。そこで釋尊は自分が此世に興出する所以は全く念佛を說かんが爲めなり。汝念佛の行者を守護するなら其供養を受けるであらうと仰しやると如

何にも仰せの通り念佛行者を守護しましようと誓ふたので其供養をお受けなされたことある。この理由で八大龍王は念佛行者を守護するのである。これから頂いてみれば釋尊は早やこの世へお出ましの時から念佛を說くを本懷として居られたのであると思はれたらさて〳〵有難い出世本懷のお念佛ぞと存じ稱名相續せらるゝが肝要ぢや。

然るにこの八大龍神は名は畜生道ぢやけれ共生命に限りのない程長壽するもので、身は宮殿に住し、口には百味飲食、常に綾羅を着飾り快樂自在の日暮しをして居る。私共は穢れたことを畜生のやうなと申すけれ共、この八大龍神は如何なる人間も及ばぬ程の果報ぢや、これ等はワザと畜生の身を感得する所謂戒急の者と

定急の者との違ひぢや、人間や天人は戒急の者ぢやで生は人天となつて勝れるけれ共佛法には疎遠ぢや、この八大龍王は人天の果を求めず畜生で日に三熱の苦みを受けるけれ共何時でも佛法に遇ひたいと思ふ心から畜生の龍と生れ長壽を本として過去七佛の昔から佛法を聽聞、其上法滅毎に龍の本願として一切の佛法は皆龍宮に納まるのぢや、其昔、龍樹菩薩も龍宮にお入りなされて過去七佛の御經を御覽なされたと申すことぢや、身は畜生道で居乍ら何でも佛法に値遇したいと存じて居るから念佛と云へば喜んで守るとある。如何樣長壽して法を聞きたい求めたいと思へば龍蛇が適當と見へる。あの法然上人のお師匠さんの肥後の源光阿闍梨は遠州櫻ケ池に這入られ大蛇の姿となつて彌勒菩薩の御出世を待つ

て御座るのは有名なはなしぢや、若し參詣したいと思はるゝ方は東海道線の堀の内と申す停車場で下車し、それから自動車で行きますと暫くで着けます。先づ附近の淨土宗の應聲院と申すお寺へ參り源光阿闍梨の用ゐて居られた御道具を拜見し、池に入らるゝ前後の樣子を十分拜聽して參る方が便利ぢや、毎年秋の彼岸の中日には大蛇供養が行はれます。この日は西は九州、東は北海道などから集られ何萬人と云ふ參詣人でありますと。一度參るべき所ぢや、源光阿闍梨も人間で居つては生きかはり死に代りせにやならぬ。其度毎に隔生即忘と申して前生の菩提心を忘れて了ふものぢやから最も命の長い大蛇の姿を受け彌勒の出世を待つて居らるゝのぢや、然らば源光阿闍梨は自力の協はぬに目をさまし彌勒菩薩

の御出世に遇ふて證りを開かうとてわざ〳〵蛇身を受けてお待ちなされるのに今日の吾等は良い時分に生れ合はし、本願を信じ念佛さへすれば彌勒の出世を待つに及ばず、其上八大龍王や無量の龍神に守らるゝ身の上とはよく〳〵の仕合せ者ぞと彌増に御慈悲を喜ばねばならぬ。

八大龍神は長壽するのみでなく仲々威勢の強いものぢやでもろ〳〵の惡魔は恐れて近寄らぬとある。それぢやから他宗他門の葬式には龍の頭を造りて燈籠や天蓋の上にかけてある。これは惡魔を拂ふ爲めぢや、わが御宗旨では龍の頭を拵へるには及ばぬ。造り物や拵へものぢやない、生身の八大龍王や無量の龍神に晝夜不斷に守らるゝ故惡魔の障りのあらう筈なく光明から光明の往生と

仰ぎ擧てはお喜びなされ。

第十九席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、閻魔法王尊敬ス。

五道ノ冥官ミナトモニ、ヨルヒルツネニマモルナリ。

正しく念佛行者は閻魔法王に守護せらるゝことを明して下された御和讃である。閻魔と申すは梵語で支那ではこれを雙王と譯して居る、雙と云ふは兩つと云ふことぢや、これは閻魔法王は兄と妹と兩人であるから雙と云ふたのであらう。兄の方は男子の罪を正し、妹の方は婦人の罪を正すのぢや、然るに閻魔王は表面忿怒の相を顯はして居らるゝが心は慈悲忍辱のお方ぢや、それもその筈ぢや本地は地藏菩薩の化身ぢや、この閻魔王を六道の中へ入れ

てみると餓鬼道の中へ這入るが而し餓鬼と申しても飢と難義するやうな餓鬼道では御座らぬ。正法念經から聞いてみると餓鬼にも色々の種類がある。有財餓鬼、多財餓鬼、少財餓鬼、身口餓鬼、針口餓鬼、凡て〻三十六種の餓鬼があると説いてある。先づ有財餓鬼と申すは金銀瑠璃の宮殿に住し口には山海の珍味を食し、身には綾羅を重ね、五欲の樂みに思ふまゝの日暮しをして居る。其麼結構な境遇なら決して餓鬼とは云はれぬでばないか、そのやうな贅澤なものをなぜと餓鬼と名づけるのちやと云へば如何に美膳に向ふて美味を食しても其終りの一と口は忽ち腐敗して虫が湧くから何時まで經つても食に飽くことを知らぬ。依つて有財と申すのちや、今閻魔王もこの類ぢやけれ共、地藏の垂迹で地獄の罪人

を救はんとて現はれなされたのちや、世間には地獄はあつても閻魔さんさへ居られなんだら宜からうと思ふ人があらうがそれは大きな誤りで、全體で地獄で苦みを受けるのは吾身の業報の現はれで決して他人樣から仕向けられたものちやない、況や閻魔から造られて罪人を苦められるのではない、其上閻魔王が居られなんだら罪人は無量永劫地獄から免るゝことは出來ぬのちや、閻魔は何か罪人の功德や追善などを緣として地獄から出してやりたいが念願ぢや。

死んだ罪人が未だ生れ所が定らぬ間が中有ぢや、死んで直ぐに閻魔王廳へ出る者もあり、又は七日で出る者、五七日で出る者もあり、吾身々々の業報に依るのちや、其間は香を食事とするのち

や、御一同一生涯不法懈怠な日暮して居つて今度の閻魔王の廳へ引出されたら何と返答せらるゝか、罪を隠そうと思へば俱生神の筆の先は胡魔化すことは出來ず、造りと作つた今までの罪は淨玻璃の鏡に現はれ、隠しとうても隠すことの出來ぬ自業自得の罪咎一生涯世路の忙しさに追はれまして座禪觀念も出來ませなんだと申せば、閻魔の御意には汝能く承れ娑婆には彌陀の念佛あり、世事を營み乍ら妻子を養ひ乍ら稱へらるゝ念佛、なぜこの法を聞かなんだかの御咎めには一言一句の云ひ解けは出來ませぬぞや、然るに今如來のお慈悲に本づき念佛する身になつてみれば、昨日まで白眼で睨んで御座つた閻魔王が今日から打つて變つて御自身はかりちやない、五道の冥官引き連れて晝夜常に守りづめにして下

さるのちや。

さて閻魔と地獄とは本地垂迹の違ひはあるけれ共、共々に地獄へ墮ちた罪人の苦みを救ふて下さるのちや、あの山城國矢田寺の滿慶上人、後滿米上人と改められたが、この方が地獄へお入りなされて閻魔王の爲めに大乘戒を授けられた、其時閻魔は喜んで其御禮にとて米の俵を下された。小さい米俵ちやけれ共、一生盡ると云ふことがないでそれから滿慶を滿米と改められたのちや、この滿米上人が地獄を御覽なされた時に袈裟を掛けた罪人が火炎の中浮つ沈みつ苦患を受けて居るで、罪人も多い其中で袈裟を掛けながら地獄へ墮ちるとは如何なる業報の現はれちやとお尋ねなさると我は定業の罪人に非ず六道能化の地藏菩薩なり、普代衆生の

行で晝夜六時に衆生に代りて此の苦しみとお答へあらせられた。
滿米上人これを聞いて深く感心せられ娑婆へ歸つて其御姿を其ま
ゝ刻まれたのが今山城の矢田寺の地藏尊である。其地藏が閻魔と
あらはれ地獄の罪人を愍んで下さるのぢや、然るに今日のわれ、
人は本來は必定地獄が住み家とあればやがて閻魔のお胸を苦める
奴なれ共、祖師善知識の御教化に依り、信心決定して念佛を喜べ
ば閻魔法王も安堵せられ、影の形に添ふ如く晝夜常に守つて下さ
るのぢや、さて次に五道の冥官と云ふも、世間の業報で冥官と生
れ罪人の罪を糺明せられるけれ共、大乘至極の上から見れば矢張
佛菩薩の化現で衆生の罪を救はんが爲めに現はれて居らるゝのぢ
や、そんなら獄卒は有情か非情かと言ふに閻魔王の前に居る牛頭

馬頭は有情ぢや、これ人間の業報で罪人を糺す鬼となるとある。
あの奥州の貞任宗任はこの鬼となつて八幡太郎義家を請ひ受けと
云ふ說もある。されば有情の獄卒は閻魔の前に居るばかり、八大
地獄の火炎の中に居る十六角を備へた鬼や又は十六の眼目を持つ
た鬼などは非情で私共の業の力で怖しい姿と顯はれ、己れの業力
で己れを責めるのである。アナ恐しいは業の力で御座るぞや。

第二十席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、他化天ノ大魔王。
釋迦牟尼佛ノミマヘニテ、マモラントコソチカヒシガ。
ヱー席を重ねて聽聞に及ぶ現世利益和讃、正しくこの和讃は念
佛の行者を魔王が守護するこの御意で御座る、魔王と云ふは過去

世十善の業に依つて欲界最上の他化天に生れ十六億の眷屬あつて共に五明の快樂を受け歡喜極りなき身ぢやけれ共、其性分が至つて嫉妬深く、人が善事をするを見ると忽ち其善事を嫌ふて妨げをするのぢや、これは自分が欲界の最上に住むものぢやから、欲界の者共をば皆わが眷屬と思ふて善を修し道を行ずると魔道に背くものぢやから、それを妬んで障りをするのぢや、世間には寸善尺魔と申して一寸の善事を行ふとすれば一尺の障りがあると云ふのはこの道理ぢや、時にこの魔王と云ふは神通力を持つて居るものだから、人を惱まし苦めるのに神通を施し、或は美婦と現はれ或は美男となつたり、時には童兒童女と化して邪魔するのぢや、そうかと思へば今度は佛や菩薩の姿を顯はして人を喜ばしめて邪道

へ陷れる、又は天龍夜叉の畏るべき相を現じて人を惱まし、凡て佛道修行の妨害をする者は皆この魔王の所爲で御座る。然るに念佛の行者にはこの妨げをせぬのみか、尙其上に守護いたしましようとお釈迦様の御前でお誓ひしたとある。其理由は釈迦如來が十九の御時出家せられ檀特山に入り難行苦行十二年、御年三十にして山を出で給ひ成佛せんものと金剛寶石に赴き給ふに其通り道に尼連禪河あり、釈尊は其河へ這入り沐浴して垢を落し給ふに、この時魔王は妨げをしようと思ふて河の岸を高くして登ることの出來ぬやうにしたのぢや、これ釈迦如來が前後十二年の間御修行なされ五體も疲れ切つて居り、久し振りに垢を落し給ふものぢやから其力の落つたのを見込んで岸を高くして登れぬやうにしたの

ぢや、其時樹神來りて樹の枝を弛ませたので釋尊は手を伸ばし漸く登ることが出來た、此を大經には沐浴金流天按樹枝と說かれてある。それから恒河を一飛びに超へさせられ、金剛寶石に御出になつたのぢや、この寶座は金輪際より生じたものたから如何な魔も動かすことは出來ぬ。されば過去の七佛ごの方も皆この寶石の上で成道なされたとある金輪際の石ぢや、魔王の力でも何ともすることの出來ぬ石ぢや、各の信心も金剛心と云ふのはこの理由ぢや、一度お領解すると貪欲の水の力でも流れず、瞋恚の火の力でも燒けもせず、如何な惡知識の敎へでも動かされもせず、一と度德奉れば往生は一定御助けは治定、この心轉倒せず虛僞ならずやがて目出度往生する故に金剛心と申すのぢや。

さて釋迦如來はこの寶石の上に坐し玉ひ、時は四月八日の曉ぢや、つら〳〵思惟なさるゝに過去七佛は各七寶の敷物の上に坐して成道し玉ふたとある。我も何か敷物はなきやと思召すと、忽ち帝釋天が天下り清淨な孔雀の羽毛のやうな草を獻じた、世尊その名を尋ね玉ふとハイこれは吉祥草と申しますとお答へ申した、世尊は喜んで其吉祥草を御受けなされ、それを敷物として東に向ひ先づ惡魔を降伏して其後成道せんものと降魔の印を結び玉へば魔の宮殿へそれが響き渡つた、そこで魔王は不思議に思ふて驚いて居ると眷屬の魔王が馳せ參じ只今悉多太子が金剛寶石に坐して三界の主とならうとて正覺の坐を組む體で御坐ると注進すれば魔王は大いに驚き、コハ何としたら宜からうやらと慌てゝ居ると次か

ら次へと注進が這入るので今は猶豫ならぬ、先づ軟語を以て世尊を欺かんと立派な若い娘となつて憍々として世尊の御前へ來り、鮮かな容量、迦陵頻伽は聲を出し、ノーノー悉多太子様、長々山での御修行、さぞお疲れ遊ばしたであらう、これから妾共が朝夕お側でお仕へ申して御給仕を致しましようと申上ると其容量の美しいこと甚麼人間でも迷はぬはなく、仙人も忽ち通力を失ふやうな有様、其時釋尊はイナトヨ、汝等婦人と化して我を誑さんとするは大きなる誤りなり、汝其容量を以て我心を傾けんと存ずれど我より汝を見れば甚だ不淨極まれり、イザこれを見よとて光明を以て其婦人の形を照し玉へば五臟六腑表面に透き通り不淨の姿が表てに現はれたものだから魔王も恥づかしく思ひ、忽ち逃げ歸つ

て了ふた、この有様を見た大魔王は大いに怒り此上は刄を以て世尊を降伏せんものをと澤山の眷屬共を引き連れ恐しい形を現はして惱ますけれ共一向に効目がない、今度は矢を以て射殺そうとすると其矢が世尊の胸元まで來ると忽ち天へ舞ひ上り曼陀華となつて降る、さては失敗つたりと二つの矢をつごうて放てば八葉の蓮華となつて降つて來る、今は魔王も詮方なく、この降魔の印を結んで居れば致方なしと退いて了ふた、そこで世尊はいざ正覺を取らんとて吉禪坐に結跏趺坐し給ひ根本煩惱の無明を斷除し東方明星の登る時廓然大悟とお悟りなされ、三界の獨尊大聖釋迦牟尼如來と正覺をお取りなされたちや、この正覺を知らせようとて八萬四千の光明を放ち玉へば其光明につれて大地は六種に震動し其光

りは忉利天夜摩天から非相非々相天まで照らしたことある。それのみならず四天王梵天帝釋、龍神八部諸天善神一人も殘らずに集まられた。其他他方世界の善神まで來り玉へど他化天の魔王のみ見へぬのでサテ心得ぬとて光明を以て魔王の宮殿を照し玉ふと魔王の宮殿は俄かに震動して喩へてみれば風浪の烈しい大海に船を浮べた様で今にも宮殿は崩れかゝらうとする、魔王はドツト聲を擧げて泣き叫ぶばかりぢや、これぢや仕方がない今は降參仕りましようと、それから大勢の家來を連れて一同に佛前へ參り只管降參したけれ共世尊は仲々お許しがない、佛法に障りをなすやうな者は許すことは出來ぬと仰しやつて仲々御承知がない、そこで梵天帝釋などが打ち寄つてお詫を申され漸くお許しがあつたのぢや、

其時世尊の仰せに、われこの界に出現せしは偏へに佛法弘通せんが爲め、其中でも彌陀の本願南無阿彌陀佛は在世末代の一切衆生を濟度する念ぢやから餘の法よりは取分けてこの念佛こそ大切なれば汝等は盡未來際の末々までこの念佛を稱ふる者を守るや如何にと仰しやると、其時魔王共は畏るゝ若し念佛稱ふる者に妨げをしましたらわれ等の魔界を粉ツ葉微塵にして下されても苦しう御座りませぬ。念佛者には妨げをせぬのみか晝夜不斷に守護いたしますると申上げたれば世尊も漸くお許しになつたと申すことを只今御和讃に南無阿彌陀佛を稱ふれば、他化天の大魔王釋迦牟尼佛のみまへにて守らんとこそ誓ひしかと仰せられた。この因緣承つてみればこの御和讃の御心が愈明かに聞へることぢや。

時に守らんとこそ誓ひしかの「か」の字は清んで讀むのか濁つて「が」と讀むのかと云ふにこれは「か」と清んで讀むのが當然ぢや、其理由はこのしかは助辭で過ぎ去つた過去の意をあらはすのぢやで是非清んで讀まねばならぬ文字ぢや、古歌に

昨日こそ年は暮れしか春霞
春日の山に早や立ちにけり
戀すてふわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひ染めしか

これ等の歌の「か」は皆澄んで讀む、今も濁らず守らんとこそ誓ひしかと澄んで讀むのぢや、何れにもせよ念佛行者には魔王までが妨げをする隙間がないのみならず、其上お守り致しますること云ふ

誓ひを立てたことはやれ〳〵有難いお六字ぢやと頂かるゝが何より有難いことぢや。

第二十一席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、他化天ノ大魔王。
釋迦牟尼佛ノミマヘニテ、マモラントコソチカヒシカ。

前席に於て荒々一首の御意はお話に及んだことぢやが、こゝに一つの不審がある。其故は、念佛者には魔王は妨げられぬと云はるゝけれ共廣い世間を眺めてみると隨分念佛を喜んで居る人にでも魔事と云ふことがあるやうだがそこから見れば強ち一概にも申されますまいと云ふのぢや、なる程一應は御最もなはなしぢや、而しこの御和讃は他化天の大魔のことを仰しやつたので、總じて

魔と云ふのにも種々あるのぢや、マー一つには天魔、これは第六天の魔王のことで念佛者には妨げをせぬのみか晝夜に守りましようとある。二つには病魔と云ふがある。これは病氣が魔王となるのぢや、マメ達者な身體なればあらゆる佛閣道場へも參詣し御教化を聽聞して一時も早くお慈悲喜ぶ身にならるゝがよい、而し參りたいの心は山々なれ共ごうも身體が思ふやうにない、足が痛いやら頭痛がするやうで心苦しくも五欲の吾家を出兼ねるこれが病魔と申すのぢや、さて第三に五蘊魔、これはわが身體が魔になるのぢや、僅かな娑婆の渡世家業に追ひ立てられ忙しい多忙ぢやと晝夜浮世の事ばかりに心身を勞し一向後生氣も起らず大切な御慈悲を聞かうともせず、所謂醉生夢死でこの世を暮すのが即ち五蘊

魔と申すのぢや、殊に婦人などは吾姿を繕ふに餘念なく、イヤ頭髪を結ばねば參られぬの、斯麼衣服では參詣出來ませぬの、これでは恥しい、外聞が惡いなど申して吾姿を繕ふことのみに心を引かれて御緣のある法座へも一向出澁るのは、これ姿や形が邪魔になつて大切な佛法を聽聞せぬのはこれ自分の姿や形が魔王なのぢや、この他寒暑風雪などを厭ふて參らぬのは皆自分の身體を大切に思ふから懈怠になるのぢや、大經には一世の勤苦は須臾の間なりとあれば少し位苦しいことはあらうけれ共未來永々劫の大樂を思ふてみれば、この世の少しの苦しみ位は何共ない筈ぢやに、其心のないのはこれ吾身を大切にするから起きる故にこれを五蘊魔と申すのぢや、さて第四に死魔、これは命の短いのが魔王ぢや、

壽命の長いのはこれ法の寶で命長らへた所詮には有難いみ法も聽聞し隨分お慈悲喜ぶ身になれるのにそれが短命で命が終り五道に流轉するのはこれ生命が魔王ぢや。

此他廣い世間を見渡してみれば名聞利養にのみ心身を奪はれ了ふて折角人界に生れ乍ら御法座へ出て一句の法問を聞くこともせぬのは誠に殘念なことでは御座らぬか、この世は僅かな假りの宿、電光石火の住處と思はれたらやがて來る未來を大切に思はねばならぬ筈ぢや、彌陀の本願は貪欲離れよではない、妄念停めて來ないではない、金銀惜み乍ら、田地田畑家内眷屬に執着しながら斯かる者をこのまゝ御助けの御慈悲で御座るとはやれ〳〵有難やと喜び奉れば惜しや欲しやの煩惱の寢床から直付に淨土參りの身の

上ぢや、其上娑婆に命のある間は又この世も大切ぢや、されば蓮如上人は人間のありさまにまかせて世を過すべきこと肝要なりとも仰せられて自分々々の天職を守り國民の義務に背かぬやうの日暮しが肝要ぢや、世の中は知足安分と云ふて足るを知ると云ふのが一番安全ぢや、だから昔から花は半開を觀よ、酒は微醉に呑めと申して何事に依らず過ぎたるは禍の元、滿つるば缺くる初まりぢや、古い歌にも

淺くとも又も汲むことよもあらじ
われに事足る山の井の水

世の中はあるにまかせて事足らぬ
なきに事たる身こそ安けれ

千石萬石の米俵を積んで置いても喰ふのはお腹一杯ぢや、千疊萬疊の廣い家でも家中一ばいになつて寢られるものではない、そう考へてみれば六疊敷の小さい家でも身さへ入れられたら不足は云へぬ筈ぢや、足ることさへ知れば世の中は安穩ぢや、自分は貧乏ぢや、親や子供が思ふやうにないと歎く人もあるけれ共それは皆過去の業報のあらはれぢやと思へば堪忍ならぬことはない、其麼愚痴は止めにして思ふやうにならぬのを御緣として御慈悲に本づくのが肝愼ぢや。

さて段々と魔王のことをお取次に及んだがそれに付て過去世の怨敵が魔王となつて佛法の妨げをしたと申すことがある。それは七高祖の中の道綽禪師の時、有難い念佛の法問を聽聞せんと三里

の山奥から一人の女が子供を連れて參詣申したが何時も御法座の始まる時分になると懷ろの吾子は火の附くやうに泣き出す、二日通ふても三日通ふてもわが子に妨げられて一句の法問も聽聞が出來ぬ。斯くて前後七日の間足手を運んだけれ共まだ一坐の聽聞の出來ぬのにホト〳〵困り果て、其女は愈々決心して吾子憎いにあらね共永の未來には變へられぬ。むごい親ぢやと恨んで吳れるな母が成佛したら第一に其方を救ふであらう。萬望母の未來の爲めに死んでくれよと吾懷ろの子供を谷底へドツト落してイザお參りしようと出掛けたら暫くすると空中遙かに大音聲で吾は惡魔なり汝過去拘婁孫佛御出世の時佛法聽聞の妨げをなした其恨みを晴らそうとて汝が子と生れ今日まで障りをなしたが今は恨みもこれ限

りなり、汝成佛せばわれを救ふて呉れよと叫んだので件の女は吃驚仰天、それから全く浮世を離れた尼となり念佛三昧で暮したと申すことぢや。すれば妻子眷屬佛法聽聞の妨げをするのは皆魔ぢや、然し妻の喜びに手引されて自分も御法義に入れば取りも直さず妻が良人の善知識ぢや、良人の喜びから家内が佛法者になつたのなら良人は妻の善知識ぢや、わが一生は同行善知識と同じ家に暮し、未來も一蓮托生のお證りとは、さて〳〵この世も未來も目出度契りと存ぜられ廣大のお慈悲を長忘れせぬやうにせらるゝが有難い、先づ。

第二十二席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、他化天ノ大魔王。

釋迦牟尼佛ノミマヘニテ、マモラントコソチカヒシカ。

段々席數を重ねてお取次に及ぶ魔王のおはなし、魔王と申せば他所ばかりかと思ふて居たら飛んだ間違ひぢや、足元から鳥が立つ、吾心が魔王となる。全體人間の心程淺間敷いものは御座らぬぞや、佛法や世の法律がなかつたなら人間は甚魔ことを仕出すか解りはせぬ。

引かれなば惡しき道にぞ入ぬべし
心の駒に手づな許すな
心こそ心迷はす心なれ
心に心こゝろ許すな

これ等の歌は皆我心を誡めたものぢや、それを禪宗などでは心の

弟子になるな、心を弟子にして心の師になれと申して、心で心を使へ、心に使はれたら悪事ばかりぢやぞよと誡められて、如何にも其通りぢや、日々夜々思ふこと爲すること碌なことは一つもない、けれど有難い御當流の御教へぢや。

煩悩具足と信知して
本願力に乗ずれば
すなはち穢身すてはて、
法性常樂證らしむ

蓮如上人は我身は悪き徒ら者と思ひつめてこの御意なされて悪い心が起つたならお慈悲に免じ、悪事をなさんとすれば、やれ〳〵勿體なや、かゝる徒ら者を御助けの御本願ぞとお慈悲から謹しま

せて貰ひ、他に指をさゝれぬやうに身を持ち家庭圓滿に生活させて貰はねばならぬ。けれど其お慈悲を喜ぶと申す中に、若しや若し慢心が起つたならこりや佛法第一の敵ぢや、たとひ天魔に見込まれずとも若しやこの慢心が起つたなら大に未來に妨げをするのぢや、われこそは信心を得て居る。われは能く勤める。われは他人様より澤山に喜ぶ、われは能く聽聞して居る。われは能く念佛する。われは怠りなくお禮を遂げる。これ等は悉く慢心ぢや、これ等慢心家の常として同行の中へ出て法義を高聲で物語りしたり又は初心の同行と思へば人中でこなしかけ、坊主の法談に批評を加へたりして更に恭敬の心のないのは皆慢心の同行ぢや、これ等の同行の心中を解剖してみると只法義の道理道筋を知つたばかり

で眞實お慈悲喜ぶ心がない、只法義者振るので世間に云ふ羊頭を掲げて狗肉の賣るの類ぢや、蓮如上人が佛法者後世者と見へぬやうに振舞へと御意見なされるのはこゝぢや、善導大師は我身は現にこれ罪惡生死の凡夫ぢやと仰しやるのもこゝぢや、つまり慢心の起るのは吾身は地獄一定と思へぬからぢや、蓮如上人が信心を得たと思ふは得ぬなりと御叱りなされたのもこの慢心を誡めて下されたのぢや、そんなら往生は不定々々と思ふて喜ぶのかと申せば今も云ふ通り蓮如上人は凡夫の機を扱ふのを誡められたのぢや凡夫の我情で言ふたことは皆自力なり、虚妄なり、不決定ぢや、ちやに依つて凡夫の我情で計らふた往生得たり、信心得たりと思ふのは未だ得ぬのぢやとお誡め下さるのぢや、往生程の一大事は

凡夫の計ひに非ず皆佛の所作ぢや、障子一重見へぬ凡夫が佛果を窮むる大事を決定してこれで良いと濟まされる道理のあらう筈がない、只往生は佛願難思の不思議力でお助け下さるゝことよと佛智に打ち任かせさへすれば佛の方より往生は決定して下さるのぢや、これ元本願力のお約束を違へ給はぬ故、我等が自分の心で決めた信心ではない、全く他力御廻向の信心故に往生は一定御助けは治定と阿彌陀如來の方から吾人の往生を定めて下さるのぢや、依つて歎異抄にも

親鸞ニオキテハタヾ念佛シテ彌陀ニタスケラレマイラスベシトヨキヒトノオホセヲカウムリテ信ズルホカニ別ノ仔細ナキナリ念佛ハマコトニ淨土ニウマル、タネニテヤハンベラン、マタ地

獄ニオツル業ニテヤハンベラン、總ジテモテ存知セザルナリ。と仰せられて、念佛は地獄墮ちの業やら極樂の種やら一向存知せぬ。只南無阿彌陀佛のおいはれを聞いて疑ひなく往生するぞと仰しやる善き人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細はないぞと仰やる。一宗開闢の祖師でさへ念佛は往生の因とは知らぬ。只御師匠より傳へて下された故疑ひ晴れて往生するぞと喜ぶより外はないの御意ぢや。

約束の念佛は申し候に

やらうやらじは彌陀のはからひ

熊谷蓮生坊の歌ぢや、熊谷蓮生坊も年寄てから往生の日の御告げを蒙つて有難いと御師匠法然様の御許へ申送られたら法然上人の

御返事に

何事ニツケテモ佛道ニハ魔事ト申スコトノユヽシキ大事ニテ候ナリ、ヨク〳〵御用心候ベキナリ。

これ夢のお告げに誇りて慢心を起してはならぬぞ、愼んで念佛申せと熊谷は元より慢心の起るやうな同行ではなけれ共、若しや若しと御心配の餘り右のやうな御消息文を遣はされたのである。斯かる道理を承つてみれば仇にも慢心の起されよう道理はない、愈〻わが身は地獄一定の徒ら者と見限りお慈悲の樹蔭に立ち寄りて念佛申さるゝが有難い、先づ。

第二十三席

天神地祇ハコトゴ〳〵ク、善鬼神トナヅケタリ。

コレラノ善神ミナトモニ、念佛ノヒトヲマモルナリ。

この和讃は總じて上の和讃を結ぶ思召ぢや、上にある梵天帝釋等の諸天を天神と云ふ、又地神より龍神等を總じて地祇と申すのぢや、これ等の善神と仰しやるのは上に擧げてない天地の善神、日本で申せば天照皇大神宮を初めとしてあらゆる神々、これ等の神明權現さんが悅び玉ひて、よくこそお慈悲に本づいて吳れた、信心の身になつて吳れたぞと影の形に添ふ如く念佛の行者を護つて下さるのぢや。

時に只一と口に神と申すけれ共、これ等の神にも權社實社の區別がある。太神宮ぢやの、多賀明神などは權社と申して何れも佛菩薩の化現ぢや、又人の死靈生靈其他狐狸などを祭り込んだのを

實社と云ふのぢや、この實社などに近寄りて願立てなどすると輪廻の邪業と云ふて五百生の間畜生道の苦みを遁るゝことは叶はぬことある。されば決して實社の神に近寄つてはならぬ。そんなら權社の神は怎うぢやと申せば、これ等は皆佛菩薩の化現であるから祈らずとも念佛の聲につれて喜び悅びお守り下さるのぢや、これ求めずして現世の利益を與へて下さるのぢや、昔法然上人が太神宮の神體を拜み玉へば朝日の形にてお出ましなされ、其中に金色の六字名號が現はれてあつたと申すことぢや、法然上人もさても太神宮の御神體は阿彌陀如來かと其まゝ寫して下されたのが名高い法然上人日の丸の名號と云ふのぢや、されは太神宮を始めとして其他の神々は皆阿彌陀如來の變化にて在しませば、今信心を得

て念佛を申し、未來を大切に思ふ者なら本地の誓約を信ずる者故祈らずとても神や守らんで八百萬の神々様は喜び守り玉ふことあるのぢや、然るに實社の神は佛法を忌み嫌はるゝ故念佛者とあれさて權社の神は斯様な次第で此方から希ひ求めず共御利益はあば神の方から遠ざかるのぢや、されば念佛行者は諸天のお守りが強いから邪神も近づかず、善神は喜び勇んで守つて下さることはさて〳〵廣大な御慈悲ぞと只何の中からも稱名相續せらるゝが肝要である。

第二十四席

願力不思議ノ信心ハ、大菩提心ナリケレバ。
天地ニミテル惡鬼神、ミナコトゴ〳〵クオソルナリ。

エー、この和讃は今まで述べて下された南無阿彌陀佛は只の念佛ではない、信行具足の他力の念佛ぢやと云ふことを明して下された御讃文である。

逢ひみての後の契りを玉章に
深きこゝろのあらはれにけり

ぢや、今までお述べ下された梵天帝釋等の守護し玉ふ念佛、息災延命七難消滅する念佛は現世祈禱と心得て申す念佛か、又滅罪生善の念佛か、又は定善の念佛か、又は散善の念佛か、念佛の理由が分らぬ故、今まで述べた諸天の守護に預る程の念佛は常並々のお念佛ぢやとは思ふなよ、願力の不思議より顯はるゝ信行具足の南無阿彌陀佛ぢやと云ふことを知らせんが爲めに上の意を受けて

今願力不思議の信心と仰しやつたのである。この願力の不思議より起る信心と云ふことは御聖教から頂いてみれば、信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起すと仰せられて、この信心は己が手造りの信心ではない、佛智より顯はるゝ大菩提心と云ふことぢや、一概に菩提心と云ふけれ共、この菩提心と云ふにも聖道の菩提心、淨土の菩提心とがある。聖道の菩提心と云ふは御和讃で頂いてみれば自力聖道の菩提心、心も言葉も及ばれずとあつて、これ三恒河沙の諸佛の出世のみもとにありし時、大菩提心起せども自力かなはで流轉せりで、今日の吾等では仲起せるものではない。

彼の有名な西行さんは俗名を佐藤兵衞範淸と申して北面の歴々

の武士であつたが一旦浮世の無常を觀じて頭を剃り落しわが妻子に別れて出家しようとせらるゝと、妻は頻りにそれを差し止め、今家を出て行かれては後に殘つた妻や子供は何となります。妻子に憂き目をお見せなさるのか、妻子に難義かけては眞實の菩提心では御座りますまい、よもやそれが慈悲深い佛の敎へでは御座りますまい、須臾思ひ止つて下されと泣き叫びましたが西行はなかなかそれを聞き入れようとはせぬ。今度は七つになる寵愛の娘が足元に取り縋り、ノウ父上樣、あなたが御出家なさるのなら妾を殺した上で出家して下さい、イザ殺してたべと泣き崩れる、其取り縋る娘をば椽の上から庭前へ蹴り落したら石に當つてなほも泣き叫ぶ、これを見た如何な西行も肝に應へ、當り所が惡うて怪我

はせなんだか、痛みはせぬかと思へばそゞろ涙に咽び

世を捨てる捨てるわが身は捨てぬかは

捨てぬ人こそ捨てるぞと見る

吾子を蹴り落す位なれば、世を捨てぬ人の目からは西行は實際世を捨てたと見へようけれ共、表面は捨てゝも心の中では恩愛が離れず、若しや痛みはせぬかと内心に心配の起るのは實に世を捨てたのではない、イザこの恩愛の絆を絶ちましようと遂に家を出て再び妻子を顧みず諸國修行に出掛けられたのぢや、或時大和の長谷寺へ參詣し一夜佛前に通夜せられたが、ツイ隣りの席に一人の尼僧がさも殊勝氣に念佛して居る姿を能く〳〵みれば、コハ珍らしや昔のわが女房ぢや、さて〳〵女房まで出家したのか、すれば

後に殘つたわが娘は誰が養育するのであらうと思へば又も涙の種ぢや、いや〳〵斯麼こと思ふては却って菩提心の妨げぢや

夜もすがら念珠繰る音の聲すみて

思はずたまるわが涙哉

それからは眞實發心して修行せられたことある。後々の世まで名を殘した程の西行さんでさへわが子を思ふ恩愛は離れ悪いのに、今日の愚かなわれ〳〵には迚も及ぶことでは御座らぬ。

さて次に淨土の菩提心と申すは如來廻向の信心のこと、この信心卽ち金剛心、金剛心卽ち菩提心この心卽ち他力ぢや。

淨土ノ大菩提ハ

願作佛心ヲスヽメシム

スナハチ願作佛心ヲ
度衆生心トナヅケタリ

而し菩提心と申せば自行化他でなければならぬ。それぢやから聖道門では吾身を捨てゝなり其他を化しようと思ふ、これが眞の菩提心と云ふものぢやに、淨土の菩提心は吾身の往生を願ふまで他を化すると云ふ心のないのはホンマの菩提心とは云へぬではないかと申す人があるが、全體聖道門の菩提心は自分發起の菩提ぢやから我心から化他を思ふが、淨土門のは如來廻向の信心で佛の大慈大悲が今日の吾等の胸に顯はれ玉ふのぢやで吾方から信ずるやうであるけれ共、本來は佛の化他の心を吾等が信心とする、其信心の體が佛の化他利物の御心ぢや故に、他を化する力は吾方に

はないけれ共、稱へる稱名には不可稱、不可說、不可思議の功德を具して其功德が行者の身に滿つれば齊しく衆生に廻向しようと自づから其德が現はれ流れ出でゝ、一切衆生の御法義に入る緣となるのぢや、依つて御開山はこれを常行大悲の利益ぢやと仰せられ又只今の御和讃にも

スナハチ願作心ヲ度衆生心トナヅケタリ

と仰しやつたのである。又

南無阿彌陀佛ヲトゲルニハ
衆善海水ノゴトクナリ
カノ淸淨ノ善身ニエタリ
ヒトシク衆生ニ廻向セン

とあれば自づから十方法界に廻向の義を具して居る、吾方から手向けて廻向するにはあらね共自からも信じ他にも教化させて下さるのぢやで、願作佛の心はこれ度衆生の心なりと仰しやる、世にはこの常行大悲の利益を履き違ひをしてこの世から還相廻向の利益ぢやと思ふのは大きな間違ひぢや、還相廻向と云ふのは淨土へ參りてそれからの事、この利益は往相廻向に着いた利益で常行大悲と云ふものぢや、それぢやから一家の家の中に一人の信心者があると自然と其家内の者は申すに及ばず其家に住む動物までが遠い菩提の緣を結ぶとある。すれば一番肝心なのは御信心ぢや、それぢやからこれを菩提心と仰しやるのである。斯く頂いてみれば有難いは淨土の菩提ぢや、出家發心の形を本とせず、捨家棄欲の

姿を標せず、只もろ〳〵の雜行をすて、斯かる徒ら者をお助けの御本願ぞとお縋り申せば、奉公し乍ら獵漁りしながら、淺間敷い罪業の日暮ししながら佛果圓滿のお證りとはやれ〳〵嬉しや有難や、やゝもすると西行何人ぞ我も勤めようと姿を墨の法衣に易へ風呂敷一つで出掛けてみてもそりや西行の眞似をしたのぢや、杖と笠とは西行に似て居るけれ共、心の中は雪と墨染の違ひ、仲々難ケ敷いのは自力聖道の菩提心で御座る、先づ。

第二十五席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、觀音勢至モロトモニ。
恒沙塵數ノ菩薩ト、カゲノゴトクニ身ニソヘリ。
正しく佛菩薩護念の御利益ぢや、觀音勢至は菩薩の上首ぢやで